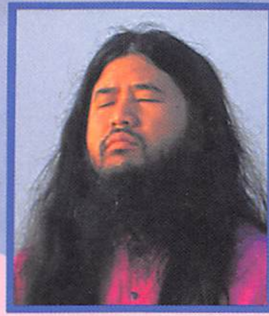
神通力者への道 2



人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち

オウム出版広報編集部 編

神通力者への道 2

人間から神へ生まれ変わった
麻原尊師の愛弟子たち

オウム出版
広報編集部 編

はじめに

ありきたりの生活を送っていた〝人間〟が、修行によって人間の限界を超え、〝神〟へと生まれ変わっていく――その実体験を描いて話題になった『神通力者への道』。本書は、その読者の熱い声に応えて作られた第二弾である。

ここで、神という言葉について少しご説明しておきたい。神というのは、人間より高い世界に住む神秘的な力と高い智性を有した魂のことである。つまり、ここでいう「神になる」というのは、普通の人間が持っていない神秘的な力――いわゆる神通力と、ずば抜けた智性を身につけていくということを指しているのである。

もともと、オウム真理教の根幹をなす原始仏教の修行は、人を超えて神になり、そして、その神さえも超越して、絶対的な自由・幸福・歓喜の状態である〝最終解脱〟に至ることを目的としている。正しい修行さえしていれば、だれでもこのプロセスを着実にたどっていくことができるのだ。本書でご紹介している麻原彰晃尊師の弟子たちのように――。

この本を世に出すことによって、一人でも多くの人が神への道、解脱への道を歩き始めてくれるのなら、それはこれ以上ない喜びである。

オウム出版広報編集部

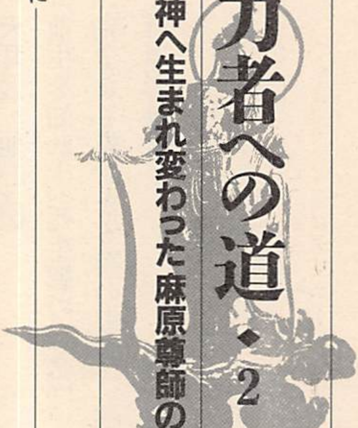
一九九二年二月十五日

※なお、この本をもっと深く理解なさりたい方は、次の本を参照していただきたい。

『マハーヤーナ・スートラ』
『タターガタ・アビダンマ　第一誦品』
『タターガタ・アビダンマ　第二誦品』
『超越神力ＰＡＲＴ１　天耳通・他心通』
『超越神力ＰＡＲＴ２　前生を知れ！　死生智の秘密』
『超越神力ＰＡＲＴ３　完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通』
（いずれもオウム出版・麻原彰晃著）

神通力者への道・2

❖人間から神へ生まれ変わった麻原尊師の愛弟子たち



●はじめに —— 3

◎透視をし、過去世を知り……
絶妙なる修行の世界 —— 13

●体験した光の世界

●クンダリニー——尾てい骨に眠る神秘のエネルギー

●シャクティーパットでギャンブルに連勝して

●初めての極厳修行――驚いた尊師の神通力
●甦える過去世
●前世はオットセイだった！
●苦しみを苦しみと感じなくなって……
●こんな楽しい修行はない
●成就者としての証明
●なくした物を神通力で発見！
●あなたも人間を超越できる

◎光に包まれた至福の境地――55

●体が浮いてしまう
●軽やかに生まれ変わって
●びっくり仰天――甘露水でクンダリニーが覚醒！

●次々と起こる神秘体験
●自分の手を透視する！
●ラージャ・ヨーガの限界
●促される心の成熟
●慈愛の光に包まれて
●決死のアンダーグラウンド・サマディ
●この喜びをすべての魂に

◎死の扉をくぐって——81

●あれから二年
●銀色に輝く子供たちがやってきて
●あれよあれよという間に……
●信じることが難しい

●煩悩に振り回されて
●死からの生還
●何もかもが遠い
●再び死に向かって――もう解脱しかない
●飛躍的に高まる霊性
●立位礼拝――エゴとの闘い
●戦慄の地獄の世界
●アンダーグラウンド・サマディに入る
●地獄・餓鬼・動物――三悪趣の体験
●人間の存在そのものが哀しい

◎グルメよりも、ファッションよりも素晴らしい
たどり着いた真実の幸福――135

●新しく「誕生」したわたし

●人生を振り返って
●"本当の自分"を知りたい
●清らかな世界へのあこがれ
●過去の悪業
●もっと早く知っていれば……
●尊師を一目見たい
●聖者
●迷い続けて
●異次元の笛の音にいざなわれ
●素晴らしき真理の世界
●グル、麻原尊師
●解脱へのあこがれ
●快い修行生活
●極厳修行開始!
●修行の目的は……
●食欲は幻影

- ●目まぐるしい神秘体験
- ●人の心が移ってくる！
- ●〝バルドー〟の体験
- ●四日間で得たものは
- ●煩悩を滅して広がる心



透視をし、過去世を知り……

絶妙なる修行の世界

※オウム真理教では、クンダリニー・ヨーガの成就者は、師、または正師と呼ばれる。
また、成就者は、ホーリー・ネーム（祝福された修行者名）で呼ばれる。

◉体験した光の世界

八九年二月、オウム真理教富士山総本部道場の瞑想室。電気が消えて真っ暗なその部屋で、チューラガヴァッチャ正師※は、いつものようにツァンダリーの瞑想を行なっていた。

――と、突然、アイマスクの濃い闇の中に、白銀色の光の粒が、打ち上げ花火のように吹き上げて散った。

「なんやろう、これは……。」

チューラガヴァッチャ正師は、驚いた。瞑想中に光が見えるというのは、初めてのことだったのだ。

「もしかして、これがみんながよく言ってる〝光〟なんかな？」

そう思いつつ、チューラガヴァッチャ正師は瞑想を続けた。

すると、また、白銀色の花火が打ち上がった。今度は、前よりも白銀色の粒が多い。

一回、二回、三回……。蓮華座を組み、ツァンダリーの瞑想を続けた。どんどんどんどん光が強く輝くようになっていく。最初は、あまり強い光ではなかったのに、徐々に徐々に何十発も一瞬にして花火を打ち上げたように、眼前が一面白銀色になり、光の粒がきらめきながら散っていく。最後に、白銀光が吹き上がり、滝のように上方から流れ落ちていった。

「――それは、〝クンダリニー〟が上がっているんだよ。」
麻原尊師は、チューラガヴァッチャ正師にそうおっしゃった。

◉クンダリニー――尾てい骨に眠る神秘のエネルギー

クンダリニー――あなたは、この言葉を聞いたことがあるだろうか。おそらく、精神世界に興味のない人は、全くなじみのない言葉に違いない。しかし実は、このクンダリニーこそ、あなたを真実の絶対的な幸福へと導いてくれる神秘のエネ

ルギーなのである。人を超えた力——神通力もこのクンダリニーを覚醒しなければ、得ることができないのだ。

　このクンダリニーは、だれでも持っているが、普通は尾てい骨に眠った状態にある。では、その眠ったエネルギーを目覚めさせるにはどうすればよいか？　そこで出てくるのが修行である。チューラガヴァッチャ正師は、修行によって、光次元のクンダリニーを覚醒させることができたのだ。いや、単に覚醒させるだけではなく、その後さらに修行を続けることによって、「クンダリニー・ヨーガの成就」をなすことができたのである。

　クンダリニー・ヨーガとは、クンダリニーを覚醒させ、上昇させ、ナーディー※に詰まっている煩悩を昇華させるヨーガのことである。このヨーガの成就をなすことができた者は、人間を超えることができ、並外れた智性と神秘的な力を身につけることができる。つまり、このクンダリニー・ヨーガの成就をなしたチューラガヴァッチャ正師は、人を超えることができたのである。

※微細な身体を構成しているエネルギーの流れ道。

――これから、このクンダリニー・ヨーガの成就者と呼ばれる人たちが、どのようにして普通の人間から、修行によって進化し、人間を超越していったのかという過程を克明にご紹介していきたい。
そのまず、第一番目の成就者として、ダイナミックなクンダリニーの体験をしたこのチューラガヴァッチャ正師の世界へ、あなたをご招待することにしよう

◉シャクティーパットでギャンブルに連勝して

人なつっこい微笑み。顔には、人生の年輪を表わすかのように、深いしわがいくつか刻まれている。京都弁の残る軽快な口調は、相手を思いやる心が感じられる。
一見すると、〝優しそうな初老のおじさん〟といった雰囲気のチューラガヴァッチャ正師。そんな正師が、オウム真理教に巡り合ったのは、八六年五月のことだった。ギャンブルが大好きで、現世的な楽しみにどっぷりとつかっていたが、〝シャ

クティーパット〟がきっかけで修行の道に入ったという。解脱者の透明なエネルギーを直接移入して、相手の霊性・精神性を一気に高める高度なイニシエーション※、シャクティーパット……。宗教的な興味はなかったが、

「超能力を得て願望を成就したかった」

と正師は、語る。シャクティーパットを受ければ、人間が改造されて、そのような神秘的な力がつくと思ったのである。

……そのシャクティーパットの効果はありましたか。

——ありましたね。ものすごい。初めてシャクティーパットを受けた後のことなんですけど、とにかく勝ちまくるんです。

例えば、何気なくパチンコ屋に入って落ちている玉を何個か拾ってやってみると、あっという間に何台もフィーバーしたり、馬券を買おうと思って予想表を見ていると、ある馬のところだけが黄色く浮き上がって見えて、

※エネルギー移入を含む秘儀伝授。



「これや！」
と思って買うと、実際に的中したりとかね。こんなことが、シャクティーパット
を受けてから二、三週間は続きました。
「うわあ、シャクティーパットってなんてすごいんやろう。」
って思ってねえ(笑)。
……それは、ずっと続いたわけですか。
――続きませんでした。シャクティーパットによって、尊師のエネルギーが入っ
てきて、そういう不思議な力がついているわけですよね。それは、結局借り物の
力ですから、そういう願望成就でエネルギーを消費すると、なくなってしまうわ
けです。二、三週間経つと、パッタリと勝たなくなってしまうと。
でも、また、シャクティーパットを受けると連勝するわけです(笑)。
……当たれば面白いでしょうから、どんどんのめり込んでいったんでしょうね。
――それがですね、かえって面白くなくなったんです。だって、やる前から結果

がわかってしまえば、ギャンブルの醍醐味というのは全然なくなってしまうでしょう。競馬というのは、自分の目当ての馬が自分の推理どおりに走って勝つところにその楽しみがあるわけなんですから。

それと、そのころから修行の素晴らしさを実感し出して、そういうものに興味がなくなってきたんですね。瞑想中、「不死の甘露」が頭頂から落ちて歓喜状態になったり、シャクティーパット中ものすごい至福感に包まれたり、いろんな体験をしたんですよ。その至福感、歓喜というのは、ギャンブルをやる楽しみよりも、数倍、数十倍もすごいものだったんです。

ですから、少しずつ現世的な楽しみから心が離れて、修行の方に向かうようになりました。

◉初めての極厳修行――驚いた尊師の神通力

シャクティーパットにひかれ、修行の魅力に気づいて、徐々に修行に励むよう

になっていった正師。奥さん（現ヴェールカンダキヤー師）が、同じくオウム真理教に入信していて、非常に熱心に修行していたのも、正師の心がさらに修行に向いていく一因となった。

いつしか、全くギャンブルには関心がなくなり、オウム真理教の修行一筋の生活になったとき、正師は、尊師より「成就のための極厳修行に入りませんか」と言われる。奥さんと一緒に——ということであった。

極厳修行とは、成就を目指して限界まで行なわれる文字どおり厳しい修行のことである。正師は、出家をせずに在家にいながらにして、成就を目指すことになったのである。

——このときの修行の瞑想でね、初めて光と確信できるような光が見えたんです。白銀色の光が、打ち上げ花火が上がったように広がって……。もう何とも言えん綺麗な世界でしたね。

その光は、尊師から「クンダリニーが上がっているんだよ」と言われたんですけど、その後も、ツァンダリーをやっていて、白銀色と黄金色の煙が立ち昇ってオーロラのようになった光の中に自分が溶け込んだりしました。

そういうときほど、瞑想がよくできて、時間の感覚がなくなるほど集中できましたね。

……修行は、出家者の方と一緒にやってたんですよね。

——そうです。途中まででしたけれども。

あのとき、やっぱり実感したのは、尊師は出家者であろうと、在家者であろうと弟子のことは全部ご存知だということですね。だから、安心して修行できましたね。

例えば、こういうことがあったんです。一緒に修行に入ったヴェールカンダキヤー師がクンダリニー・ヨーガを成就してしまって、わたしだけ一人ぽつんと瞑想ルームに残されたんですね。で、そのとき思いきりショックを受けまして、ふ

てくされたんですわ。それで、食事時間でもないのに黙っておにぎり三食分作って、海苔も持ってきておやつにして食べて、寝てたんです。すると、尊師から突然、
「三食昼寝つきでは、成就できませんよ。」
って言われまして（笑）。隠れておにぎりを作ったので、だれにも知られてないはずなんですけど（笑）。もちろん、尊師は、そのとき瞑想ルームにはいらっしゃらなかったし……。

もうやっぱりみんなお見通しやな、そう思いましたね。その前に、初めて瞑想中、光の体験をしたときにも、だれにも言ってないのに、
「光がいよいよ上から降りてきましたね。」
と尊師に瞑想状態を見抜かれたりしましたしね。
ちゃんとまじめにやろう、尊師はすべて見ていてくださるんだって、それから心を改めて頑張りました。

……このときの修行では、ラージャ・ヨーガまで成就なさったんですよね。
――そうです。クンダリニー・ヨーガまではいけませんでした。座法を組んだ状態でのダルドリー・シッディ（空中浮揚の前段階）が起こりませんでしたし、何よりもやっぱり心が成熟してなかったですねえ、今思うと。つまり、クンダリニー・ヨーガの成就者と呼ばれるだけの精神レベルに達していなかったんですよ。
尊師は、それをご存知で、クンダリニー・ヨーガの成就を与えてくださらなかったんだと思います。

◉甦える過去世

クンダリニー・ヨーガの成就の条件は、四つの体験である。すなわち、「二十四時間途切れることのない意識の連続」「光への没入」「化身（けしん）※の体験」「空中浮揚」である。チューラガヴァッチャ正師は、このすべての体験を満たすことができず、その一段階下の〝強靭な意志のヨーガ〟ラージャ・ヨーガの成就までしかなすこ

※修行が進むと使うことのできるこの肉体以外の特別な身体。

とができなかった。
しかし、このとき正師は既にクンダリニー・ヨーガのプロセスに入ってきており、クンダリニー・ヨーガ特有の霊的体験も若干あった。また、神通力もわずかであるが体験しており、その中には、
「自分のそれまでの考え方を変えてしまった。」
ものもあるという。それは、宿命通（しゅくみょうつう）——自分の過去世を知る力であった。

……宿命通で感慨深い体験があったそうですが。
——自分は前世で、ある武士だったんですね。それで、僕は、ある家に逃げ込んで、そこでかくまってもらうわけです。そのときに、ある部屋まで誘導してくれたのが綺麗な芸妓（げいこ）さんで、それが今の女房でした。もちろん、顔は違うわけですけれどもわかるんです。
で、そのとき僕は、結局、捕まってしまって、引き出されてしまったんです。

で、首を切られるときに、

「あっ、これが僕だな。」

って思って……。顔はちょっとわからないんですけれども、後ろ姿を見ている感じでね。ほんで、座ったところを、首切り役人が横に立ちますよね。僕は、

「はよ、首切らんか。」

と言うているんですね。

……その首切り役人が、今生のおやじでした。わかりましたね。そのときには、もうなんちゅうんですかね、身の毛がよだつような感じでしたね。自分を捨てていったおやじですから、やっぱりそういう縁だったんかなあって思いましたけれど。

まあ、自分は今までおやじのことを恨んでいたけれども、おやじがいたからこそ尊師に会えたんですから。親に恵まれたとは思わないけれども、その両親がいたから、現世があるんだと思いましたね。

このような〝前生夢〟は、疑い深い人から見るとただの夢物語に思えるかもしれない。しかし、ちょうど同じ時期に、奥さんであるヴェールカンダキヤー師が、これと不思議に一致するヴィジョンを見ている。

「すごくリアルな生々しい前生夢を見たんです。

かいつまんで申しますとね、動乱の時代の京都に住んでおりました。はっきり京都ってわかります。なぜなら、芸妓でしてね。そこのお茶屋さんの娘としてその時代おりまして。で、家族も芸妓見習いの少女が二人と、それから仲居さんっていわれる、おかみよりもちょっと年のいった方がおりまして、そして芸妓のわたしと五人家族で住んでいるんですね。で、かなり格式のあった家柄らしくて、そういう建物の中の様子がものすごくリアルに浮かんできましてね。

突然、そこへ一人の男が飛び込んでくるわけですね。かくまってほしいと。で、あの時代のおかみっていうのは今の女性からは想像できないくらい度胸のある方

が多かったみたいなんですよね。だから、いきなり男が飛び込んできても落ち着いて応対されていました。

その一部始終を芸姑のわたしも見ていますし、もう一人の修行している現実のわたしがそれを全部ジーッと見ているわけですね。もう、ほんとに物語を地でいくような感じで映ってきたんですね。

『かくまってほしい。ゆえあって名前は申し上げられない。』

『わかりました。』

と。そして、そのおかみは一目で見抜いちゃうわけですね。その男は何者かっていうことを。いろんな社会の階層の男の人ばかり相手にしてるわけですから。

で、秘密の部屋へ案内していくわけですね。ですけれども、かくまいきれないんです、運命的に。いずれは捕まってしまって、自分たちもかくまったという罪で罰せられるということを読んじゃうわけですね。

そういう場面がばちっと映ってきましたから、目が覚めた瞬間に前生夢だとわ

※原因として生み出されたものは、必ず結果を招くということ。

かったんですよ、自分で。ほとんど会話はなかったんですけれども、芸姑のわたしの、その男性に対する気持ちがものすごく通じているんですね。それが不思議でしたね。だから、それが今の主人ではないかと思います。」(ヴェールカンダキャー師談)

●前世はオットセイだった!

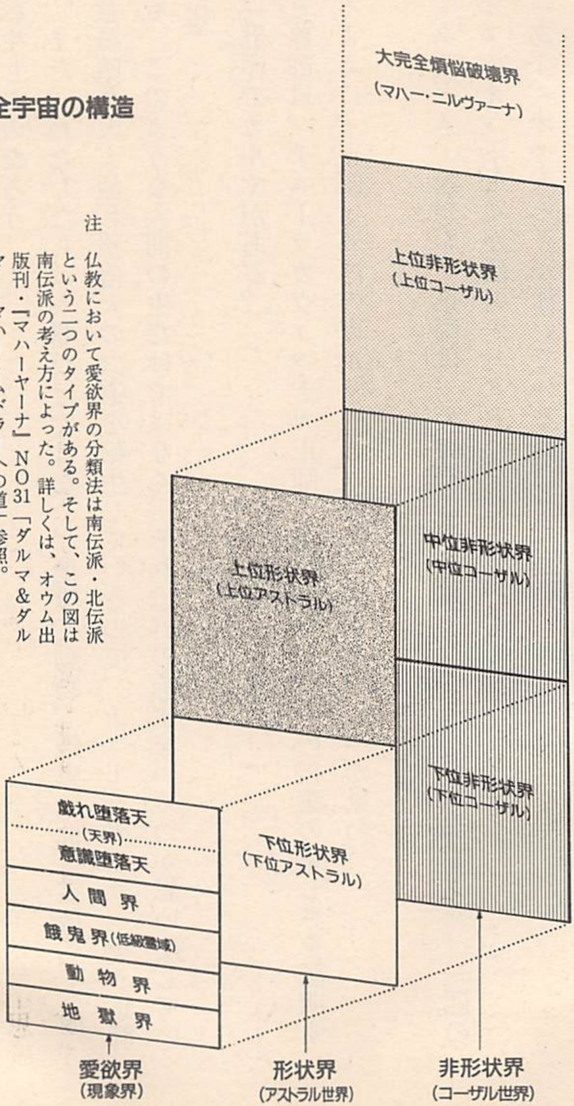
チューラガヴァッチャ正師とヴェールカンダキヤー師は、修行からたまたま出たときに、

「こんなヴィジョンを見た。」

とお互いに話をし、それが不思議に一致しているのに驚いたという。

仏教では、わたしたちの魂は普通、愛欲界を輪廻転生し続けていると説く。そして、前生積んだカルマ※によって、今生が決定されており、また、今生積んだカルマによって来世が決定されると説くのである。おそらく、チューラガヴァッチャ

全宇宙の構造



注

仏教において愛欲界の分類法は南伝派・北伝派という二つのタイプがある。そして、この図は南伝派の考え方によった。詳しくは、オウム出版刊・『マハーヤーナ』NO31「ダルマ&ダルマ——マハー・ムドラーへの道」参照。

正師とヴェールカンダキヤー師の場合、前生からの縁によって今生も夫婦として転生したのだろう。

また、わたしたちは人間だけではなく、地獄、動物、餓鬼（低級霊域）、人間、意識堕落天、戯れ堕落天の六道を転生しているので、チューラガヴァッチャ正師も、このような人間の生だけではなく、それ以外の前生をいくつか思い出している。

「邪淫のカルマがある。」

と尊師は、チューラガヴァッチャ正師に言われたが、その言葉の正しさを証明するように、正師は邪淫のカルマの強い動物の前生をいくつか見た。

あるとき、瞑想中、正師は、大海原に浮かぶオットセイの一群を見た。一匹のオスのオットセイが雌のオットセイをたくさん連れている。

「あー、オットセイが泳いでいるわ。」

チューラガヴァッチャ正師は、何となく愉快な感じでそのヴィジョンを見ていたが、しばらくして場面が変わった。今度は、オットセイが死ぬ場面だった。先程のオットセイかどうかわからないが、死骸（しがい）がたくさん転がっている。

そのオットセイの中の一匹を見ているうちに、チューラガヴァッチャ正師はふっと気がついた。

「これは、僕や！」

――すると、また急に場面が変わり、突然体が何かでがんじがらめになった生々しい感覚を味わった。どうやら、先程の場面らしい。人間に捕まえられて、岸に上げられてしまったらしいのだ。ほどなくして、

「ガンッ！　ボカッ！」

棒で叩かれたような音がして体に激痛が走った。焼きごてを当てられたような激しい痛みである。

「ガーン！」

頭に猛打を加えられて、チューラガヴァッチャ正師の意識はだんだんと遠くなっていった。

「あー、僕は死ぬんだ……。死ぬんだ……。死ぬんだ……。」

――そのとき、チューラガヴァッチャ正師は、瞑想から覚めた。

また、あるとき、チューラガヴァッチャ正師は、蛇のヴィジョンを見た。そのヴィジョンの中では、アオダイショウよりもちょっと長いぐらいの蛇がたくさん草原を這っていた。

「うわっ、気持ち悪い。」

蛇が嫌いな正師は、そう思って見ていた。

すると、どこからともなく生臭い臭いが漂ってくる。しばらくその臭いをかいでいると、なぜかだんだん妙に懐かしい思いがしてきた。

「変やな。」

そう思った瞬間、パッと視野が変わった。自分の周りにものすごく太くて高い草が生えている。まるで、自分が小人にでもなったかのように、周りはすべて巨大な世界だ。

チューラガヴァッチャ正師は、その大きな草むらの間をザーッと這っていった。周りを見ると、自分の仲間がたくさんいる。その仲間と体がすれ合うと、何ともいえない快感が体に走った。

チューラガヴァッチャ正師は、ヴィジョンの中の蛇になっていたのである。

「――君は蛇が長かったな。」

麻原尊師は、チューラガヴァッチャ正師の話を聞いてそう言われた。これもおそらく邪淫が絡んでいるのだろう、嫉妬で狂ったカルマによって、蛇になったということであった。

◉苦しみを苦しみと感じなくなって……

このような宿命通、光の体験など、様々な体験をして、このときの修行は終わった。ラージャ・ヨーガの成就を与えられた後も、正師は、次のクンダリニー・ヨーガに向けて修行を続けていたが、心がまだ成熟していなかったためにそこまで到達することはできず、しばらくして極厳修行を出ることになった。

このときの修行で、出家修行者と長く接することによって、出家の素晴らしさというものを強く印象づけられた正師は、極厳修行を出てから出家を決意する。やはり、同じように感じていたヴェールカンダキヤー師と共に、九〇年五月、正師は、出家を果たした。

……出家してからは、どんな修行をしたんですか。

――ワーク（奉仕修行）をしながら、暇を見て修行をしていました。

日常的には、修行に対して「やるぞ！」と決意する『決意如意足』と修行を喜

ぶ『喜覚支（きかくし）』、これを常に心がけました。後から、またクンダリニー・ヨーガの極厳修行に入ったわけですけれども、この『決意如意足』と『喜覚支』は、すごく支えになってくれたと思いますね。

具体的な修行としては、マントラを唱えたりしました。特に、「自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」という苦の詞章を、百万回唱えたことは大きかったんやないかなと思います。これによって、苦しみが遠のいたという感じがしました。自分が苦しみを味わっても、これは自分が過去に積んだ悪業を落としているんだから、これは喜びなんやなという感じで受け止められるようになったということです。苦しみを苦しみとあまり感じなくなったというふうに思いますね。

あと、もう一つは「棒叩き」ですね。棒叩きって何かというと、座法を組んで足を棒で叩くんです。人間だれでもそうですけれど、僕も今生たくさんの小さな生き物を殺生していますし、前生でも僕は殺生のカルマを積んでいますからね。

その殺生のカルマを落とすということと、それから、彼らが殺されるとき味わった苦しみを自分も味わうという意味で、この「棒叩き」を一千万発やったんですよ。これによって、殺生のカルマがだいぶ落ちたんやないかなっていう気がします。苦しみにも強くなったみたいですね。

……そういうワークをしながら修行をするという生活を、ずっと続けたわけですか。

——そうです。九一年の十二月に、もう一回、クンダリニー・ヨーガの成就に向けての極厳修行に入れていただくまで、ずーっと続きました。

◉こんな楽しい修行はない

九一年の十二月——。麻原尊師は、サマナ（出家修行者）に向けて、このような発表をされた。

「来年（九二年）いっぱいでサマナ全員、クンダリニー・ヨーガの成就をさせる。

まず、初めに四十名修行に入れて、きっちり四十名成就させる。」

まじめにワークに励んでいたチューラガヴァッチャ正師は、この第一陣の修行者のメンバーに選ばれた。ラージャ・ヨーガの成就より約三年後——。再び、クンダリニー・ヨーガに向けての極厳修行が始まったのだ。

……このときの修行は、どうでしたか。

——ほんとにもう、なんていうですかね、一言で言うと楽しい修行でしたね。苦しみが出てきても、修行が楽しいという『喜覚支』が根づいていますから、苦しみにならないんですね。あんな楽しい修行なら、なんべんでもやらしてほしいと思いますね。

……修行プログラム自体はかなり厳しいものだったと聞いていますが。

——オウム真理教の秘儀の瞑想法、プラーナーヤーマ（調気法）、※経行（きんひん）とかが主なプログラムでした。修行時間は二十四時間で、睡眠時間は基本的になしです。

※精神を集中して歩く修行。

その代わりに、睡眠よりも心と身体をリラックスさせる「究竟の瞑想」の時間があって、それがきっちりできれば、睡眠とらなくても平気なんですよ。まあ、ただ、修行が遅れるのを承知で寝たい人は、寝てもいいということでしたけども。
食事も、僕の場合は、極端に減らしました。修行に入って三日ぐらいはちょっとだけ――ご飯とオウム食百グラムぐらい食べてたんですけれども、三日目からもう食べなくてもいいんやないかなという気になって、食を断ったんです。それから、ずーっと食べませんでした。たまに、尊師がエネルギーを込められた餅とかパンのイニシエーションがほんのちょっと出ましたけれど、それだけで二十九日間ずっと続けました。
ちょっと計算してみたんですが、そのうち、十三日間は完全な断食だったみたいです。
……その後は、食事を取ったんですか。
――それが、三十日目に食を取ったら、食べた後修行が全然できなくなってすご

く苦しかったんですよ。で、
「あー、食べるいうのは、こんなに苦しいんやな。もう、食から離れたい。」と思って。食べない方が本当は楽なんだということがわかったんです。で、それからまた、断食にしました。だから、修行中はほとんど食べなかったっていうことになりますね。
実は、僕は、修行に入る前はすごい食いしんぼうだったんですよ。それが、いきなりこういうことができたのは、尊師が成就のためのエネルギーを注いでくださっていたからでしょうね。それに、あれだけ厳しい修行でもあんまりつらく感じなかったのは、『喜覚支』に加えて、尊師がエネルギーをくれてたっていうことも大きいと思います。

◉成就者としての証明

大量に食事を取るということは、エネルギーを下げる結果となり、仏教やヨー

ガでも記されているように、修行を進めるためにはマイナスである。チューラガヴァッチャ正師は、あまり苦もなく食を断ち、修行に専念した。
もともと、ラージャ・ヨーガの極厳修行の際に、クンダリニー・ヨーガのプロセスに踏み込んでいた正師である。霊的ステージは順調に上がっていき、それまでのワークで心を成熟させていたため、修行ステージは一気に上がった。
究竟の瞑想中は明るい光に没入し、修行が進むにつれて覚醒状態となり、全く寝なくても平気な状態になった。プラーナーヤーマ中、ダルドリー・シッディも起こった。食欲やプライドという煩悩も落ちていき、心がどんどん寂静（じゃくせい）の状態になっていった。
クンダリニー・ヨーガの成就――と認められるだけのステージに達したとき、正師は、〝アンダーグラウンド・サマディ〟に入ることになる。
アンダーグラウンド・サマディ――それは、土中に埋められた三メートル四方の密閉された小部屋（チェンバー）で、四日間一人で瞑想を行なうという修行で

ある。この間、いっさいの食べ物も飲み物も口にしない。また、おわかりかと思うが、密閉されているので、空気の流入がないため、普通に呼吸していれば、生命は危なくなるという厳しい行である。

仏教やヨーガでは、呼吸というのは修行ステージを計る重要な目安とされている。煩悩が多ければ、呼吸が多く、煩悩が少なければ呼吸は少ないのである。そして、瞑想の究極状態、〝サマディ〟に至るときには、その人の呼吸は完全に停止する。

つまり、もしこの四日間、サマディに入ることができれば、空気の流入がなくとも平気だということになる。あるいは、サマディに入れなくても、常人と比べて呼吸が異常に少なければ大丈夫だということになる。まさに、このアンダーグラウンド・サマディは、その人が真に成就者であるかどうか――真に人間を超越した者であるかどうかということを調べるテストであり、そしてその証明なのである。

……四日間のアンダーグラウンド・サマディは、どうでしたか。
――もう、至福感だけです。これだけは、表現できないですね。幸せな気分でねえ。本当に素晴らしかったです。時間が早く経ってしょうがなかったですね。
僕は中に時計を持っていってたんです。やっぱり、入ってみるとしばらくは時間っていうのが気になりまして。で、二時間に一回腕時計が鳴るようにしてたら、二時間があっという間に来まして、次は三時間にセットしたんです。これもあっという間に過ぎまして、次は、六時間、そして十二時間にしていったんですが、それでも、
「早いなあー、もう、こんなに経ったんかなあ。」
って思いましたね。本当に、四日間ものすごい早さで経ってしまいました。
……四日間、全く休むことなく、ずっと瞑想して過ごしたんですか。
――そうです。寝ませんでしたね、全く。初めはもしかしたら寝るんやないかなあって思ってたんですけど、眠気は全然なかったです。覚醒状態で、意識が途切

れることなく完全に連続していました。

◉なくした物を神通力で発見！

このアンダーグラウンド・サマディに入っていたとき、正師は、印象深い「透視の体験」をしたという。

瞑想中、ふっと集中が途切れ、急に、正師はあることを思い出した。それは、東京の事務所にいたとき、なくし物をしたことだった。

「あー、そう言えばなくしてしまったなあ……。大事な物だったのに。」

そう思った瞬間、目の前にヴィジョンが大きく映し出された。それは、その事務所のある一室だった。

正師の意識は、なぜか部屋の隅にある箱に集中した。じーっと見ていると、その中に篭があるのが透けて見える。さらに見ると、その篭の中には、なくしたと

思っていた物が見えた。
「あー、あった！　あんなところに。」
そう思ったとき、正師は瞑想から覚めた。
「あれ、ほんとにあそこにあるんやろうか。」
正師は疑問に思ったが、そのときは確かめる術もなかった。しかし、やはり気になり、アンダーグラウンド・サマディから出た後、その事務所にいる法友に聞いてみた。
「……あっちの部屋の隅の箱の中にある篭を見てみてくれへんか。」
そうやって確認してみると、果たして、篭の中にそのなくした物があったのである。
　このような透視の体験の他に、※変化身（へんげしん）の体験などもしたが、神秘体験そのものはあまり多くなかったという。ただただ、至福そのものだった――と、正師は、

※下位形状界で活動する身体。

このアンダーグラウンド・サマディを振り返って語る。
長期間の断水・断食も、少ない空気量も、正師の瞑想修行の何の障害にもならなかったわけである。

◉あなたも人間を超越できる

クンダリニー・ヨーガの最後の仕上げとして、アンダーグラウンド・サマディに挑戦し、それを見事成し遂げたチューラガヴァッチャ正師。正師は、現在、オウム真理教東京本部で新しいクンダリニー・ヨーガの成就者として活躍している。

……成就してから、何か以前と変わったことはありますか。
——もちろん、心の状態は全然違いますね。いつも軽くて明るいです。
それから、願望成就がものすごいですね。特に思念しているわけではないんですけど、

「ああ、こうならへんかなあ。」

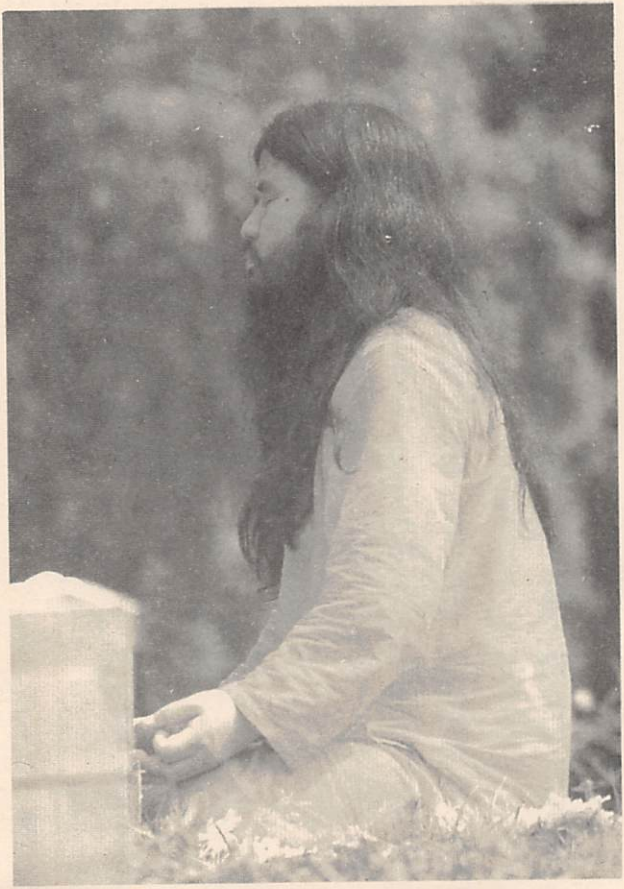
って思ったら、それが全部かなってしまうんですわ。逆に怖いですね、僕は。願望成就するっていうことは、功徳を減らしているということでしょう。願望成就の源は、功徳のエネルギーだから。だから、本当に他の魂のためになることだけ、思ってないといかんなあと考えてるんですけれどね。

神通力はまだまだですね。ただ、根っこはちゃんとついてるなあという気がしますね。だから、いかにこれからそれを磨いていくか——いうことだと思います。

……今回の修行で実感したことは、何かありますか。

——尊師の与えてくれるワーク、修行をちゃんとやっていけば、だれでも成就ってできるんやなっということですね。そして、そのワークや修行を常に喜んでやる、つまり「喜覚支」をやると、すごい修行ステージって上がるんやないかなって思います。

それから、やっぱり今しみじみと思うのは、尊師が、この弱虫をね、長い時間



※導師。宗教上の指導者。

をかけてここまで育ててくださったんやなあっていうことですね。僕は決してサマナの中では優等生じゃなかったですから。グル※っていうのは、本当にすごいなと身に染みて思いますね。だれでも尊師についていけば、成就できますね、絶対。
これからは、もっと心を強くもって、強いチューラガヴァッチャになって、尊師にどこまでもついていきたい、そしてできる限りの恩返しをしたい――そう思います。

グル・麻原尊師の慈愛に導かれて、人間を超越したチューラガヴァッチャ正師。しかし、まだ修行は終わったわけではない。それは、正師自身が一番よく知っている。彼が目指すのは、遥か先の絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の〝最終解脱〟なのである。
果てしなく続く修行の道――。彼は、今、その一歩を踏み出したばかりである。

COLUMN—1

◉六神通

・神足通
空中浮揚やテレポーテーションを行なったり、高い世界へ飛んだりすることのできる能力

・天耳通
神々の声を聞いたり、普通の人間なら聞くことのできないほど遠くの音を聞いたりする能力

・他心通
他人の心を知る能力

・宿命通
前生を知る能力

・天眼通
一般に遠隔透視能力といわれているが、これは北伝系仏教の間違いであって、実際には南伝仏教のいう死生智のこと。
死生智とは転生先を知ったり、生きながらにしていろいろな世界とつながる能力

・漏尽通
完全なる絶対なる神の叡智

仏教では、修行を行なうことによって、これら「六神通」と呼ばれる神秘的な力が身につくとされている。

この「六神通」について詳しく知りたい方は、以下の本を参照していただきたい。

『超越神力PART1　天耳通・他心通』『超越神力PART2　前生を知れ！死生智の秘密』『超越神力PART3　完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通』（いずれもオウム出版・麻原彰晃著）



COLUMN—2

◎最終解脱に至るまでの六つのヨーガ

一、ラージャ・ヨーガ

強靭な意志力を背景としたヨーガ。現在のインド・ヨーガでは、このラージャ・ヨーガが主流である。ただし、インドでは十年に一人、二人しか成就しないといわれている。

二、クンダリニー・ヨーガ

生命エネルギーのヨーガ。尾てい骨に眠るクンダリニー・エネルギーの覚醒、上昇によって煩悩（ぼんのう）を昇華する。

三、ジュニアーナ・ヨーガあるいはマハー・ムドラー

分析智のヨーガ。自らの煩悩を思索によって分解する。このヨーガの成就をもって小乗の完成とされる。仏典でいう〝阿羅漢（あらはん）〟の境地。

四、大乗のヨーガ

三つのヨーガの成就をベースに、四無量心（しむりょうしん）（聖慈愛・聖哀れみ・聖称賛・聖無頓着）の実践をなすヨーガ。

五、アストラル・ヨーガ

報身（ほうしん）のヨーガともいう。この段階まで

来ると、「魂の救済」以外には全く頓着がなくなる。

六、コーザル・ヨーガ

コーザルでデータの入れ替えを行なうヨーガ。このヨーガを完成して最終解脱をすると、すべてが自由になる。

現在オウム真理教ではラージャ・ヨーガの成就者が約百五十名、クンダリニー・ヨーガの成就者が約百名、マハー・ムドラーの成就者が八名、大乗のヨーガの成就者が三名存在する。

マハー・ムドラー、大乗のヨーガの成就者の体験は、『ザ・サマディ』『原爆覚醒』『秘儀の世界』(いずれもオウム出版)などを参照していただきたい。



光に包まれた至福の境地

◉体が浮いてしまう

ふわっ……。

あれ？　あれ？　体が飛ばされてしまう。まるで風に吹かれた風船のよう。こんなにわたしの体って軽かったのかな？

タントラウパサマー正師は、何ともいえない不思議な感覚を味わいながら、自分の体を眺めた。

重力によって大地に縛りつけられているわたしたちの体――その呪縛（じゅばく）を断ち切って、空へ飛べたら……あなたも一度はそんなことを考えたことがあるのではないだろうか。

修行は、その夢を実現してくれる。重力からの解放を約束してくれるのである。

◉軽やかに生まれ変わって

「――あれは、もうフワッとしか言いようがないですね。風に吹かれてってという感じで、ヒュンって飛ばされてしまう。」

出たばかりの極厳修行を思い出しながら、タントラウパサマー正師はそう語る。クンダリニー・ヨーガ成就の条件の一つ、「空中浮揚」――。タントラウパサマー正師は、成就の四つの条件、「意識の連続」「光への没入」「化身の体験」「空中浮揚」の中で、一番強烈に印象に残ったのは光の体験だが、この空中浮揚も印象に残っていると語る。

「身体が本当に軽くって。」

タントラウパサマー正師は、そう言って笑う。

おっとりとした優しい口調……。なんとなく、平安時代のお姫様を思わせるような雰囲気である。クンダリニー・ヨーガを成就して、身体だけでなく心も軽やかで光に満ちあふれているせいか、本当に透明で柔らかな笑顔である。

そんな光に包まれたような正師も、オウム真理教と巡り合う前は、本物の何かを求めて苦しんでいたこともあったという。

煩悩の重荷を脱ぎ捨て、軽やかに生まれ変わったタントラウパサマー正師――。チューラガヴァッチャ正師の次にはこのタントラウパサマー正師に、三年前の真理との出会い、人生を変えた瞬間から振り返ってもらった。

◉びっくり仰天――甘露水でクンダリニーが覚醒!

……育ちの良さそうなお嬢さんといった雰囲気がして、特に、現世の生活に苦しみを感じて修行に入ったというタイプには見えないですけれど、オウム真理教に入信したきっかけというのは何ですか?

――特別育ちが良いというわけでないですけど(笑)。家庭環境で、苦がなかったというのは事実ですね。

でも、わたしは、小さいころからどんなに親しい友人と話をしていても、遊ん

光に包まれた至福の境地



※尊師のエネルギーの込められた聖水。

でいても、いつもどこか冷めていたんです。満たされなくって……。何かが違う、こんなことじゃなくて、どこかにわたしが本当にやるべきことがあるんじゃないかって、感じていたんです。

そんなころ、友達に「すごい宗教があるよ」って聞いたんですね。それがオウム真理教でした。宗教にそんな興味があったわけじゃないんですけれど、何かひかれるものを感じて、「ポアの集い」に参加してみました。

そこでですね、びっくり仰天するような体験をして、入信したんです。

〝びっくり仰天するような経験〟――。それは、隣にたまたま座っていた非信徒のインド人女性のクンダリニーの覚醒だった。※甘露水（かんろすい）を飲んだ途端、その女性の尾てい骨に眠っていたクンダリニーのエネルギーが、覚醒してしまったのである。

クンダリニーの覚醒といったら、普通は何十年もかけてやっとできるかできな

いかといわれているほど困難なものだ。ときにはそれだけに一生をかけるヨーガ行者もいるという。それが、ただ単に甘露水を飲んだだけで起こってしまったのである。

――もう、あれは強烈な体験でした。

その女性は、突然強烈なエネルギーが覚醒してすごく熱がっていて、ちょっと苦しそうだったんですけれども、それも尊師とお会いしてピタリと止まってしまいました。つまり、そのクンダリニーのエネルギーを尊師がコントロールなされたんですね。それを見て、さらに、

「わーっ、すごい。」

って(笑)。ここは本物だなっていう直感も初めからあったんで、その場で入信してしまいました。

◉次々と起こる神秘体験

小さいころから心の底で求めていた修行の道に巡り合い、タントラウパサマー正師は、水を得た魚のようにバクティーに、教学に励むようになった。教学を深めるとさらに、「これは真理だ」という確信が強まっていく。そうしてついに、正師は出家をしようと決心した。

もちろん初めは、恵まれた家庭環境にあり、充実した仕事に就いていた正師は、出家をする気など全くなかったという。在家でできるだけ頑張ろう――そう思っていたのだ。そんな正師が出家を決意したきっかけは、修行で経験した多くの神秘体験だった。

……シャクティーパットを受けるために、かなり一生懸命修行をしたそうですが。

――そうなんです。それで、そのときにもう集中的にいろんな神秘体験をしたんですね。

例えば、瞑想をすると、冷たくて気持ちのいい「不死の甘露」が頭頂から落ちてきたり、ピョンピョンとダルドリー・シッディが起きたり、変化身が抜け出したり、天耳通(てんにつう)で聞こえるはずのない遠くのひそひそ話が聞こえたり……。

一番印象に残っているのは、わたしの修行のインストラクターをやってくれていたサマナの方のクンダリニー・エネルギーを霊視したことです。真っ暗な部屋の中で、その人のスシュムナー管をクンダリニーが光輝きながら駆け昇るのがはっきりと見えるんですね。

これらは、みんな尊師の本に書かれていて、経典にも書かれていることだったので、本当に感動しました。オウム真理教が真理であるという確信が深まりましたね。

……それで、出家しようと思われたんですか。

――そうですね。わたしはまだ入信して間もなくて、少し修行をしただけなのに、もうこんな体験ができる。じゃあ、尊師が言われている成就というのは、いった

いどういう世界なんだろうと思ったんです。それまで、成就なんかあんまり真剣に考えていなかったけれど、成就したいってそのとき強く思ったんですね。それで、早く成就するんだったら出家した方がいいと。

それからもう一つは、その神秘体験をたくさんしたとき、尊師のエネルギーというのをすごく感じたんです。これだけ素晴らしい体験ができるのは、尊師がたくさんエネルギーを送り込んでくださっているからだと。わたしなんかに、エネルギーを注いでくださる尊師の慈愛、それをおぼろげながら実感したんです。

そして、尊師のそばに行けたらいいなと、物理的にというわけではなくて、尊師の広くて深い心のそばに行けたらいいなと思ったんです。じゃあ、出家して弟子になったらいいじゃないって考えたんです。

尊師の心のそばに行けたら……そんな思いで正師は出家した。八九年八月のことであった。

◉自分の手を透視する！

——シュッ、シュッ、シュッ、シュッ……。富士山総本部道場に、プラーナーヤーマの音が響く。八九年暮れ、数十名の出家修行者が成就を目指しての極厳修行に入ったのだ。

懸命に、自己の限界に挑む修行者たち——その中に、タントラウパサマー正師の姿があった。出家してから、四カ月後、尊師より成就を得る類いまれなチャンスを与えられたのである。

弟子を成就させるために絶え間なく注がれる尊師からのエネルギー。激しいプラーナーヤーマと瞑想修行——。多くの修行者が修行ステージを飛躍的に上げていき、タントラウパサマー正師も、知らず知らずのうちに霊的体験・心の体験をしていった……。

「あのときの修行で、すごく印象に残っているのは、透視の体験でした。」

とタントラウパサマー正師は語る。

そのとき、正師は、アイマスクをかけて瞑想をしていた。すると、何も見えるはずのない真っ暗な視界の中に、急に何かがぼわーっと見え出した。

「え？」

手のような形のものが動いている。

「……！」

タントラウパサマー正師は、急いで自分の手を上下に動かしてみた。すると、目の前にあるぼわーっとした手も同じように動く。

「これは……。」

その瞬間、タントラウパサマー正師は悟った。アイマスクを通して、自分の手を透視していたのである。

このような透視の体験に加え、今までにないほど不死の甘露が頭頂からしたたり落ちてくるなど様々な神秘体験をした正師は、最終的に、宇宙の根元的エネル

ギー「三グナ」を霊視して修行を終える。
「ラージャ・ヨーガの成就だ。」
正師は、クンダリニー・ヨーガの前段階であるラージャ・ヨーガの成就を尊師から授かった。

◉ラージャ・ヨーガの限界

……ラージャ・ヨーガを成就して、何か変化がありましたか?
——成就して心が浄化されたせいか、今まで見ていた世界が全く違って見えました。今までわたしが見ていたものは、いったい何だったんだろう。偽りの世界だったんじゃないかって思うぐらい、あるがままにものが見えました。ここらへんは、説明が不可能で体験していただくしかないと思うんですけれど。
心も止まっていて、食欲とかの煩悩も成就したてのころは全くなくて、すごく楽だったですね。まあ、だけど、ワークに戻ってエネルギーをロスすると、やっ

ぱり煩悩が出てきました。

……どんなワークをしたんですか。

——信徒さんの修行のインストラクターとかです。結構好きでした。プラーナーヤーマでクンバカ（保息）している信徒さんに、

「はい。頑張って。頑張って……。もうちょっと！」

とか励ましの言葉をかけると、みんな頑張って、クンバカの時間を伸ばしてくれたり、体が振動して、今にもダルドリー・シッディが起きそうな信徒さんに、

「さあ、ダルドリーが起きるから、もう少し！」

と言うと、「ボン！」と、本当にダルドリーが起きたり（笑）。

人を頑張らせるのが好きなんですよ、わたし。だから、すごく楽しかったです。だけど、そういうワークをしているうちに、止まっていた煩悩がまた出てきてしまいました。

ラージャ・ヨーガはすごくもろいヨーガですから、つまり、成就の状態が崩れ

やすいヨーガですから、エネルギーをロスして意志の力が弱まるとわりとあっさり成就の状態が崩れてしまうんです。

……ラージャ・ヨーガの限界ということですね。

——そうです。それで、ああ、クンダリニー・ヨーガまで早く成就したい、できたらその次のマハー・ムドラーまで行きたいなって思っていました。

◉促される心の成熟

クンダリニー・ヨーガを成就するだけの機根（きこん）がなかったため、第一回目の極厳修行で、タントラウパサマー正師は、その成就にまでは至ることができなかった。次のクンダリニー・ヨーガの成就を目指して、懸命にワークに励む正師。そんな正師に、次の極厳修行の話がやってきたのは、それから約一年半後のことであった。

……最初の修行は、どういうメニューだったんですか。

――九一年の五月に一番最初の修行に入ったんですけれども、そのときは教学でした。真理の法則、つまり尊師の説法をひたすら学ぶというものです。これが、結局、最終的な極厳修行に入るまでずっと続きました。

……教学の効果というのは、どうでしたか。

――真理を学ぶことによって、心がどんどん成熟していったと思います。それから、尊師に対する信、オウム真理教に対する信というのが確立されていきました。

わたしは、それまで神秘体験があるから信というのを持っていたんですね。つまり、尊師のおっしゃるとおりの体験を自分もすると。そして、それはヨーガの経典などにも記されていることであると。それで、信というのを持っていたんです。

しかし、今回、オウム真理教の教えをたくさん学ぶことによって、論理的に全く矛盾のない真理の教えそのものの素晴らしさというものを感じることができた

んです。本当にオウム真理教の教義はすごいと思います。完全に、わたしたちを解脱の境地に導いてくれる、すべての魂を絶対的な幸福に導く教えだと思いますね。

……そのような修行のベースが固まってきたときに、最終的な極厳修行に入ることになったんですね。

——そうです。十二月の十四日に入らせていただきました。

◉慈愛の光に包まれて

その修行は、それまで正師が行なっていた教学修行とは全く違っていた。プログラムは、オウム真理教の秘儀を結集したような瞑想修行。修行する部屋は、神聖なヴァイブレーションに満ちあふれた尊師の瞑想ルームのすぐ下。さらに、尊師が毎日、毎日瞑想状態を聞きにこられて、一人一人に、適切なアドバイスをしてくださった。

「このときの修行では、神秘体験というよりも心の体験がすごく大きかったと思います。」
と正師は語る。
しかし、それでも「体が風船のように浮いてしまう」空中浮揚の体験や、前生を見る宿命通、二十四時間途切れない意識の連続——何日間も全く眠気を感じず、意識が鮮明な状態などを体験している。その中でも、一番感動したのは光の体験だという。

——立位礼拝（りついらいはい）の修行。詞章を唱えて五体を投地していると、突然、正師の頭上に光が現われた。その透明な光はだんだんと強くなり、ついに正師の身体はその光に包まれてしまった。
光輝くまぶしい光。魂がすっぽりと光に包まれて、正師は、至福感に浸った……。

――このときの光というのが、わたしにとっては、単なる光じゃないんですね。尊師の愛、そのものなんです。精妙な柔らかい表現しようのない慈愛のエネルギー……。だから、わたしにとっては、光に包まれたというよりも尊師の慈愛のヴァイブレーションにすっぽりと包まれてしまったという感じがして、至福感に浸ったんです。

わたしは、それまで尊師がいらっしゃる建物でワークをしていたこともあって、尊師が自分のための時間など全くない状態でオウム真理教の活動の指揮をとられたり、それから弟子たちのためにイニシエーションを与えられる姿を見てきました。だけど、今回の修行で、尊師が本当に自分の命を削って弟子を解脱に導こう、真実の絶対的な幸福の世界へ導こうとされているのが痛いほどわかったんです。

弟子を成就させるためにエネルギー移入をし過ぎて、尊師のお顔が土気色になっているときだってあるわけです。それでも、弟子のために毎日瞑想状態を聞きにこられて、エネルギー移入をしてくださると。それによって、わたしたちは煩悩

がなくなったり、経典に書かれているような高い世界の神々の体験をしているんですね。

グルは、いつもわたしたちに慈愛の光を注いでくださっている。その光が今までは見えなかったんだけれども、初めて見えたという感じがしました。

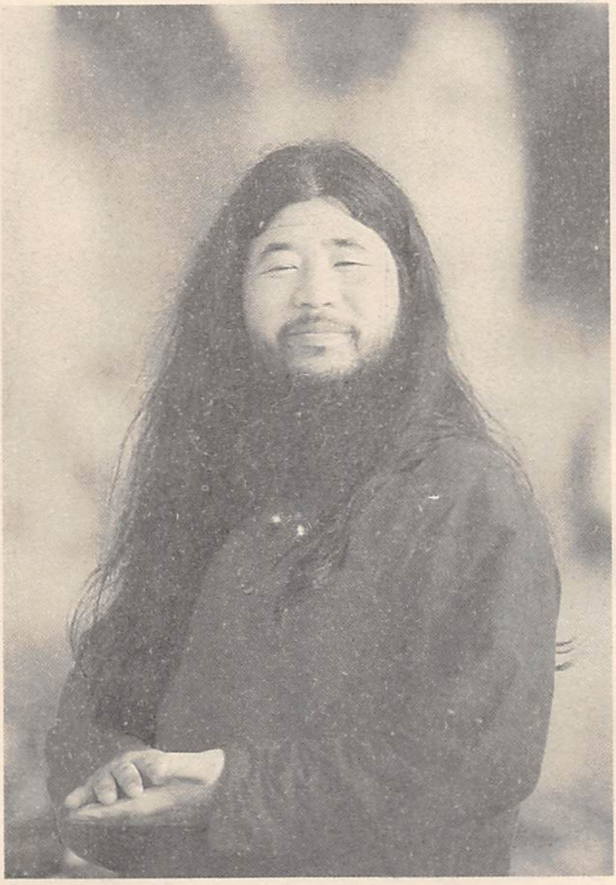
◉決死のアンダーグラウンド・サマディ

グルの慈愛の光に包まれて、これ以上ない幸福感に浸った正師。「意識の連続」「光への没入」「化身の体験」「空中浮揚」というクンダリニー・ヨーガの成就の条件のすべてを満たした正師は、修行の最後の仕上げとして四日間の決死の〝アンダーグラウンド・サマディ〟に挑んだ。

……最後のアンダーグラウンド・サマディはどうでしたか。

――それまで四日間一人で個室にこもって瞑想修行というのはやったことがなかっ

光に包まれた至福の境地



たので、初めは少しとまどいましたけれど、とにかく瞑想の詞章を集中して唱えることに専念しました。

煩悩とかは、出てくることは出てくるんですけれども、出た途端になくなるんで、瞑想にはかなり集中できたと思います。修行が少しつらくなったりしたときに、例えば、食欲とかがぽっと出てくるんですけれども、すーっと消えるんです。

……四日間、完全な断水・断食でしたけれど、全くつらくなかったですか。

——全然つらくなかったです。断食は、アンダーグラウンド・サマディに入る前にもかなりやっていましたけれど、全く平気でしたから。

結局、わたしは今回の修行に約二カ月近く入っていたわけですけれども、その間三分の一ぐらいは、完全に断食をしていました。後の三分の一は、尊師がエネルギーを込められたイニシエーションだけ。そのイニシエーションというのも、パン半分と餅半分ぐらいで本当に少ない量でした。その他の三分の一というのは、普通の食事も一日一回取りましたけれど、でも、それもやっぱりすごく少ない量

でした。

平気なんですよ、全く。食事なんか取らなくても。かえってその方が楽だし、調子がいいんです。それは、たぶん修行によって煩悩が弱まったからでしょうね。あとは、やっぱり尊師がエネルギーを注がれている特殊な瞑想空間で修行できたということが大きかったと思います。

……普通の人がチェンバーに入ると、酸素が足りなくなって、二酸化炭素が増えて、かなり生命が危なくなるんですけれども、そうなったらどうしようとかという死に対する恐怖とかはありませんでしたか。

――なかったですね。

実際、チェンバーの中で瞑想していると、心臓の鼓動が激しくなって、息が苦しくなった後に、今度は息をしなくても大丈夫な変な雰囲気になったんです。これは、尊師が本で書かれているサマディのプロセスですよね。

ふっと気がつくと、

「あれ、今息をしているんだろうか?」
って思うときがありました。その他のときでも、本当に呼吸は少なかったと思います。

チェンバーに入って四日後の、二月一日。タントラウパサマー正師は、アンダーグラウンド・サマディを終えてチェンバーから出た。厳密に測定されていた酸素消費量のデータは、呼吸停止があったということが示されていた。正師が、サマディに入っていたことが科学的なデータとして証明されたのである。

◉この喜びをすべての魂に

四日間のアンダーグラウンド・サマディを終え、正師は、クンダリニー・ヨーガの成就者として誕生した。今、正師は、白雪の舞う札幌支部で活躍している。
最後に、今、この時代に生きている人々に対してのメッセージを正師に語っても

らった。

――わたしは、何をしていても、友人と笑っていても、なぜか孤独で満たされない思いを抱いていました。もし、そんな以前のわたしのような人がいらっしゃったら、ぜひオウム真理教の門を叩いてみてほしいですね。結局、そういう寂しさは、自分の本当の生き方、真実の姿を知らないがゆえにわいてくるものだと思うんです。

オウム真理教で、修行をすれば、必ずそういう思いは消えます。わたしのように――。わたしは今、いつも喜びにあふれた生活を送っていますから。

それから、今の生活が楽しくてたまらないという人も、もう一度自分の心の中を振り返ってみてほしいですね。そして、今の生活では本当は満足していない心を見つけたら、ぜひ勇気を出して、本当の自分、真に価値ある人生を見い出してほしいと思います。

軽やかな喜びに満ちた笑顔で、そう語ったタントラウパサマー正師。彼女は、これからその喜びを他に与えるために、生きていくのだろう。そして、それこそが、「尊師の心のそばにいきたい」という彼女の願いをかなえていく道なのである。

死の扉をくぐって

修行者には、様々なタイプがある。タントラウパサマー正師のように、真理に巡り合ってすぐに、修行一筋に打ち込んでいく人。あるいは、その反対に、現世的な幸福と修行によって得られる絶対的な幸福との間で迷い、その二つを吟味し、いろいろなことを経験しながら、修行の素晴らしさを体感していく人。

ここでご紹介するタントラデュパ正師は、まさにその後者のタイプといえよう。オウム真理教に巡り合って三年目、クンダリニー・ヨーガの成就を果たしたタントラデュパ正師。霊的ステージが高く、瞑想体験豊富な正師に、どのようにして現世の生活よりも修行の道を選び、クンダリニー・ヨーガの成就へ至ったのか語ってもらった。

◉あれから二年

解脱・悟り――この本を手に取っていらっしゃるあなたの心に、この言葉はどのように響くでしょうか。自分とは関係のない遠い世界のことと感じるか、そ

れとも、自分の中にそれを求める求道心のようなものを認めるか――。

わたしは、クンダリニー・ヨーガの成就によって解脱・悟りを得ました。八九年十月末にオウム真理教に出家してから二年と四カ月目、オウム真理教、麻原尊師を知ってから三年目のことです。

あれから二年――まだ二年しか経っていないのか！　というのが今の正直な感想です。オウム真理教と出会い、オウム真理教の中で生きるようになってから、外的にも心の内面においてもあまりにも多くの出来事がありました。そして、そのどれもが刺激的というのか、想像を絶しているというのか、とにかく良いことも悪いことも含めて、普通ではとても経験できないことが起こるのです。普通の人が何十年もかかって経験することを、わずか二年で経験し、学び、考えたような気がします。そして、その延長上にオウム真理教の極厳の修行があり、解脱・悟りがあったのです――。

と、このように書くと、常に真理に対する、修行に対する確信があったように

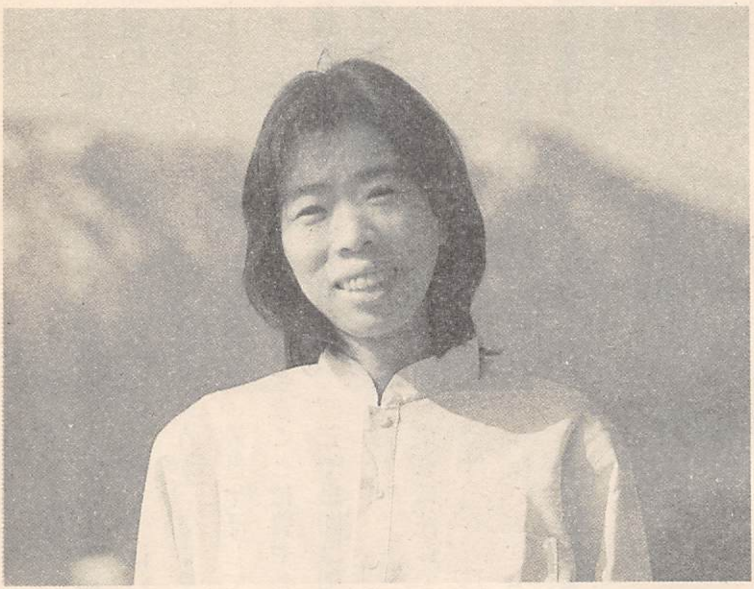
思われるかもしれません。ところが、わたしは、つい二カ月前まで、「いつ現世に戻ってもいい、現世なら現世なりに、わたしはうまくやっていけるんだから。」

などと、不遜（ふそん）なことを考えて出家生活を送っていたのです。何ということを考えていたのだろうかと、今ではそのときの自分の愚かさに恐怖さえ覚えますが、わたしの生き方、真理との出会いを振り返れば、二年でよくここまでに変わったと考える方がいいのかもしれません——。

◉銀色に輝く子供たちがやってきて

現世でのわたしは、全く宗教とは縁のない生活をしていました。編集者という職業柄、様々な分野の大変多くの本を読みましたが、神秘世界・精神世界・宗教といった分野の本だけは読んだことがありませんでした。児童文学、マンガ、フェミニズム、そしてこよなく愛していたのが映画でした。

死の扉をくぐって



大学を卒業してから勤めていた出版社を辞めて、フリーの編集の仕事をしながら、子供の本や映画について研究し、それについて書く。近い将来は文筆業だけで生活できることを目標にして、すごく自由というか、気ままな生活をしていました。やりたいことがたくさんありましたから、最低生活していけるだけの収入を編集の仕事で得て、あとの時間はすべて好きなことに費やしていました。出家する直前は、十日間は食べるための仕事をして、二十日間は創作をしたり研究したりするという恵まれた生活を送っていました。

わたしには三つ違いの兄がいるのですが、同じ東京に住んでいながらほとんど付き合いはありませんでした。仲が悪いというのではなく、お互いが自分の生活をしていて、あまり共通項がないので、付き合いもないという感じでした。

その兄が、ある日電話をかけてきて珍しく長々と話し込むようになり、おかしなことを言い出したのです。

「水を四リットル飲んで吐いてみろ。気持ちいいぞ。」

そして数日後、段ボール箱にいっぱいのオウムの本がドーンと送られてきたのです。これがわたしが麻原尊師とオウム真理教に出会った最初でした。

送られてきた本を見て、内心「困ったな」と思いました。わたしは、それまで自分を信じて生きてきましたから、それ以外のものを信じるのは難しいし、今まで宗教というものに縁はなく、これからもないだろうと考えていたからです。

ただ兄があまりに熱心に勧めるので、浄化法というヨーガの行法は一度やってみることにしよう、一度やれば彼も納得するだろうと思って、ばかばかしいことと思いつつやってみたのです。

すると、すぐに印象的な出来事が起こりました。

それは、水を呑んで吐くという行法をすました直後でした。水がうまく出せず、思いがけず時間がかかり疲れてしまったので、横になって少しウトウトとなりかけたときのことです。

玄関のドアをコンコンと叩く音がしたので、ハッと気づいて起き上がり、玄関

へ行き、だれかなと思ってドアを開けました。
するとどうでしょう、そこにはパーッと一面輝く白銀の別世界が広がっているのです。そして、やはり銀色に輝く身体を持った二人の子供――クリッと大きく見開いた明るい瞳が愛らしい兄妹らしい子供――がにっこり笑って戸口に立っているのです。
わたしは、ぎょっとして息を呑みました。二人の子供は、うれしそうに「やっと来たね」と、普通の言葉ではなく、わたしの心にダイレクトに響く〝言葉〟をぶつけてきました。二人の顔をまじまじと見ながら、わたしは、今、見てはいけないものを見ていると思い、目の前の美しい世界を否定するように、目をぎゅっとつむりパタンとドアを閉めてしまいました。
「これは夢に違いない。そう、夢なんだから早く寝てしまおう」と、先ほど横になっていた所へ戻りました。すると、そこにはわたしの肉体がちゃんと横になっていました……。

◉あれよあれよという間に……

そんな不思議な体験をしましたし、兄に言われて瞑想の真似事をすれば、色々な色や光が見え、それまであまり見なかった夢見が良くなりました。
「すごいな、おまえはやっぱり過去世で修行者だったんだよ。」
わたしの体験を聞くと、兄は自分のことのように喜び、輪廻転生も信じていないわたしには、理解の及ばないことを言いました。
そのころ、既に熱心に修行をしていた兄には何の体験もないのに、まだ修行も始めていないわたしが、そういう体験をし始めたのです。
ただ、わたしにとって神秘的な体験というものは、あまり意味がないというか、あまり関心もありませんでした。ところが、兄はオウム真理教の大師（たいし）といわれる解脱した方に会うことを強く勧めるのです。兄の熱心さを考えると、会うまで毎日毎日電話がかかってきそうでしたから、一度会えば彼もあきらめるだろうと、面談の約束をしたのです。

本当に！　会うだけで入信するつもりは全くありませんでした。

ところが、入信するつもりはないと思っている自分とは、まるで別な自分がいるように、その日わたしは、オウム真理教に入信するに必要な金額を、銀行からおろしてしっかりと準備しているのです。入信するつもりもないのに！

そして、結局はオウム真理教の道場へ行ったその場で入信してしまいました。やってみようとか、もしかしたらこれは真理かもしれないとか思ったわけではありません。わたしの意志とは関係なく、何か、もうそのラインができ上がっているという感じでした。そしてあれよあれよという間に、その六カ月後、わたしは何もかも捨てて出家までしてしまったのです。

そんなつもりはなかったのに！

◉信じることが難しい

「三年もてばいいよ」「あなたは絶対麻原さんを信じることができなくて帰っ

てくる」「現実逃避だ」――出家にあたってさまざまなアドバイスを友人からもらいましたが、だれもがわたしの選択について否定的でした。

情けないことは、わたしの中にも確信があったわけではないということです。

「だめでもともと、でも修行によって少しでも自分が変わるならば儲けもの。オウム真理教のいうところの解脱・悟りが何なのか体験してみても損はない。失敗しても小説のいいネタになるだろう。」

そんな気持ちで出家したのです。ですから、出家してからのわたしの課題は、とにかく信と帰依を培うことと、仕事柄ものすごい量のデータ（これらは修行においては雑念として妨げとなるのです）を入れていたので、それを凌ぐだけの真理のデータを入れるということがポイントになりました。

出家後、尊師に対しても、オウムに対しても好感を持っていたにもかかわらず、なかなか信と帰依を培えなかった理由は、わたしにとっての自己実現の場は、オウム以外にあるんじゃないかという、心の迷いが常にあったからです。それはと

りもなおさず、わたしの〝慢〟が障害となって真理が見えなかったということなのですが……。

「こんなに何度も聖地へ来ていて、揺れる人間も珍しいよな。デュパ。」

確か尊師とご一緒した三度目のインドでのことです。サキャ神賢（しんけん）（釈迦牟尼（しゃかむに））ゆかりの地、ギッジャクータ山で笑いながら尊師はこうおっしゃいました。

〝揺れる〟というのは、出家修行者が煩悩に負けて現世へ戻ろうかと考えること。心が修行と現世の間で揺れることです。

「尊師、わたしは揺れるという言葉は嫌いです。わたしは吟味しているのです。」と答えはしましたが、実際のところ尊師のおっしゃるとおりでした。インドどころか、わたしはカメラマンという仕事柄、チベット、ラオス、スリランカと尊師の仏教探求の旅にご一緒することができました。これはものすごく幸運なことで、そんな機会に尊師を身近にすればするほど、尊師という存在の偉大さがわかるのです。皆にうらやましがられても仕方ない仕事環境にいながら、現世的な仕事の

欲求——わたしには、幼い頃から「自分は物書きになるんだ」という、どこからともなくわいてくる思いがあって、そのエゴと現世的な成功に対する欲求を捨てきれずにいたのです。

◉煩悩に振り回されて

一九九一年、出家生活二年目を過ぎて、わたしは出家後最大の危機を向かえていました。

修行が進んでくると、わたしたち修行者はどんどん潜在意識があらわになります。つまり心の奥底にある煩悩が出てきて、外から見たらとても我がままに見えるのです。これは、自己の根本的な煩悩に振り回されている状態で、自分でも止めようがないものなのです。わたしの場合は、ワークに対する不満が高じてきました。

「嫌です、ワークやりません。帰らせていただきます。」

文章を書くことが自分のライフ・ワークだと思っていたわたしは、編集部から写真デザイン部に転属されたころから、ワークをボイコットし始めたのです。特に細かいことが大嫌いなわたしは、小さなリバーサル・フィルム一枚一枚の整理という、面倒で手間のかかる仕事ができませんでした。もちろん、そういう自分の苦手な仕事を、こつこつ成し遂げることこそ修行なのだ、ということは頭では十分わかっているのです。しかし、どうしてもそれができないために、できないことを正当化する思いが次々とわいてくるのです。

「わたしはこんなことをするために生きているんじゃない。もっと自分の能力を活かした仕事をするべきである。そうだ、わたしは素晴らしい児童文学者になるという長年の目標があったではないか。それを忘れて出家してしまったことがそもそもの間違いなのだ。」

という思いが募ってきて、ますます仕事ができなくなるのです。

そして忘れもしない、十二月四日、この日わたしは写真の仕事と並行して担当

していた編集の仕事さえも拒否して、身の回りの整理をし始めました。
「こんな信のない弟子を、何かと指導してくださった尊師には申し訳ないけど、やっぱりわたしを活かす道は他にあるに違いない。オウムには何の不満もないし、むしろ世の中のどこにいるより居心地がいいけど、そこに安住しないで、もう一度現世の荒波の中で、自分の能力を開花させることに挑戦してみよう。」
尊師は、支部の説法会に出かけられていて留守でしたので、荷造りだけしておいて、お帰りになり次第ご挨拶をして現世に戻ろうと、わたしは、今までになく強い強い決心を固めたのです。
決心を固めると、仕事をボイコットして法友に迷惑をかけているな、という申し訳ない気持ちが出てきました。明朝、ちょうど雑誌の取材が予定されていましたから、最後に、その仕事だけはやり遂げて行こうと思いました。

◉死からの生還

十二月五日早朝、わたしはオウムでの最後の仕事だと心に決めて、取材・撮影に出かけました。オウムの広報技術部で開発した潜水艦の潜水実験のため、伊豆の海へ出かけたのです。

埠頭に四トントラックを乗りつけて、トラックのクレーンを使って一人乗り潜水艦を海へ降ろしていたときのことです。技術部の人たちは、トラックの周りで作業をしていました。わたしは、潜水艦が着水するまでにはまだ時間がかかるようでしたから、寒さに震えているよりはと、四トントラックの運転席で暖を取っていました（言葉を換えればサボッていたのですが）。

そろそろ撮影をするために表に出ようかな、と思ったちょうどそのときです。トラックの周りにいた人たちの間から「ああっ」という声が聞こえたと思う間もなく、わたしが乗っていた四トントラックは、大きく横に傾いて横転し始めました。何がどうなったのかわかりませんでした。座席から投げ出されそうになりな

がら、転覆しかけているトラックをどうにか食い止められないかと思いましたが、四トントラックは、そのまま車体の右側を下にして海に墜落していったのです。

トラックの右側が海面に当たったとき、ドアのガラスが割れて、足元から海水が渦を巻いて迫ってくるのを見ました。そのとき、水に対する恐怖がわたしを襲いました。情けないことに、わたしは泳げないのです。初めて〝死〟という言葉が脳裏に浮かびましたが、まさかと打ち消しました。埠頭に着いたときだれかが辺りの水深は五メートルだと言っていたのを思い出しました。五メートルの海底に沈むことを考えると、この状況が夢であってほしい、悪夢なら醒めてほしいと願わずにはいられませんでした。

しかし、水没するトラックの運転席は、あっという間に、容赦なく海水で満たされてしまいました。わたしは、海水でいっぱいになったトラックの運転席に、完全に閉じ込められてしまったのです。

水、水、水、四方八方が水です。体は浮き上がろうとして、今は横だおしになっ

たトラックの天井となっている左側ドアに、へばりつくような格好になっています。心の準備もなく、いきなり水中に組み伏せられたようなものですから、すぐに息が苦しくなりました。ドアが開けられないかと手探りをしてみましたが、普段使っている乗用車ではなく大きなトラックでしたから、勝手もわからず、薄暗い海底では、偶然にもドアを開けることはできませんでした。それに、もう体を動かすほどの酸素は、体内に残っていないようでした。

あまり突然の出来事で、自分の置かれた状況がまだよく理解できないでいたわたしですが、呼吸のできないせっぱ詰まった苦しみが、最低・最悪の状況であることを否応なく教えてくれます。

「尊師助けてください！」

苦しさから逃れるために、わたしは思いっきり尊師を思念しました。息を止めている苦しさは、もう既に限界にきていました。

「ああ、死ぬんだな……」とわたしは思いました。

それにしても、なんて惨めな死に方だろうか。いったい、わたしのどういうカルマによって、このような死を向かえることになったのだろうか。名も知らぬ土地で、こんな苦しみを受けて死ぬなんて——わたしは何かだまされたような思いがしました。しかし、冷静にこの状況を考えると、みじめな土左衛門になって水死するしか、わたしに残された道はなさそうです。これが〝わたしの死〟なのだと、嫌でも納得せざるを得ませんでした。

「いったい、わたしは今まで何をやってきたのだろうか……。」

死ぬと覚悟が決まったとき、今までの人生を振り返っている自分がありました。

「何にも意味のあることはやってこなかったな……。」

そんな苦い思いがしました。

そのとき、締め切られた車のドアの窓越し、海水の向こうに空が見えました。きらきらと輝く、これまでに見たこともないような、鮮やかな青い青い空でした。

「ああ、なんて綺麗な青空だろう。」

明るくけがれない空の青さが心地良く目に映ります。
鼻からどんどん海水が体内に入ってくるのがわかります。
終わりかけている生を後悔しても手遅れだから、せめて目前に迫った死を良く死のう、とわたしは思いました。
「よし、死をうまく死ぬぞ!」
わたしは、尊師がわたしたちに説き明かしてくださった、人の死のプロセスを思い起こしました。もちろんその全容は知りませんが、わたしにできることは、落ち着いて死を向かえること。そうすれば、あとはグルが正しい道を指し示してくれるはずだと思ったのです。とにかく、肉体的にも精神的にも苦しみもがいて死ぬことはあまり利益にならないような気がしたので、全身の力を抜いてリラックスし、呼吸困難の苦しみを感じているこの肉体から意識を外そうと考えました。
海水が、鼻から胃へと入ってきていることにも抵抗せず、わたしは、顔面から足の指先まで力を抜き、意識を飛ばそうとやってみたのです——。

そして、わたしは、とても明るい光の中へ入りました。よく瞑想中に射し込んでくる白銀光の光とは違って、黄金色の勝った光の空間でした。そして、そこは遥か遠くにある空間という感じがしました。

そのとき、わたしの背中をぎゅっとつかむ力強い二本の腕を感じました。技術課のスバーフ師が、わたしの体を海上へ差し上げてくれています。「大丈夫か」と落ち着いた師の声がします。どうやらわたしは助け出されたようです。

埠頭に上がって、もう息をしてもいいかなと思って、静かに息をしてみました。不思議なくらい呼吸が落ち着いています。海水をだいぶ飲んだはずだと思って、二、三度せき込んでみましたが、呼吸の乱れがないのと同じように、不思議と一滴の水も出てきませんでした。

「どうやらわたしは助かり、何とか生きているらしい」と思いました。

喜びも何もわき上がってはきませんでした。ただ静かに一人で考えたいことがありました。

それは、死ぬと覚悟したとき、わたしのこれまでの人生に意味がなかったという思いがしましたが、いったいどのようなことを成し遂げていたなら、人生これでよしと思えて至福の状態で死ねるのだろうか、ということでした。

「たぶん……」と、わたしは思いました。

このわたしの生を他のために生きていたならば、他の魂を少しでも本当の意味で幸福にしていたなら、満足して死を死ぬことができたんだろうな。

漠然とそんな思いがしました——。

◉何もかもが遠い

「どうだデュパ、やっぱり現世がいいと思うか。」

道場へ帰って尊師にお会いすると、開口一番に言われました。荷造りずみだったことはもうご存じのようです。

「はあ……、現世がどうこうというより、生きていることそのものが、もう何と

なく今までのような意味がないような気がします……。」

そして事故の顚末（てんまつ）をお話ししました。最後に海中で意識を飛ばしたことについて尊師は、自分でサマディに入ったんだとおっしゃいました。

なぜそんなことができたのか、わたしにはわかりませんし、もう一度やれと言われてもできそうにもありません。しかし、死を目前にしても一度も〝死〟に対する恐怖というものがなかったことなどは、オウム真理教の修行や仏教教義を日々修習（しゅじゅう）していたおかげだと思います。死がすべての終わりだと考える人にとって、目前にした死はものすごい恐怖でしょうが、わたしたちは死が一つのプロセスだと知っていますから、何も恐れるものがないのです。

「何だかんだ言っても、デュパは神々に祝福されているなあ。」

と尊師はおっしゃいました。このような形で死と対じすることができたのは、修行者としてやはり喜ぶべきことなのでしょう。事実、この後わたしは、心においても霊性においても大きな変化を遂げるのです。

た。まず、周りで起こっているどんな出来事も、自分から遠いという感じがしました。自分の周りに透明な壁が一枚できたような感じで、現実がかつてほどリアリティを持たなくなっているのです。例えば、食事をしても何か他人が食べているような感じで、できれば食べたくないというのが本音でした。車を運転していても、心が現実から離れていって、いったん車を止めて、少し瞑想しなくては走り続けられなくなったり、座って瞑想をするだけで激しいダルドリー・シッディが起こるようになりました。

事故から一週間ほど経ったころ、関西方面へ取材に行った帰り、わたしは、高速を運転しながら、わたしへの知らせが何か入ったのを察知しました。

「ん？ 富士で何かわたしに知らせがあるな。何だろう。良いことか、悪いことか……。ああ、修行に入れとの連絡だろう。」

これらのことがすんなりとわかってしまうのです。そして、富士へ戻るとやは

りクンダリニー・ヨーガ成就の修行に入れとの連絡があったとのことでした。

十二月十三日、わたしは、クンダリニー・ヨーガ成就のための極厳修行に入りました。

◉再び死に向かって——もう解脱しかない

オウム真理教の極厳修行は、完全に解脱・悟りを目指したものです。一般的な感覚からすると、非常に厳しいものだと思われるかもしれません。いや、普通の生活をしている人には、全く信じられないことでしょう。

例えば、わたしたち修行者は、二十四時間の極厳修行に入ると、睡眠は取りません。もちろんウトウトしたり、意識がふと途切れることはあっても、横になって休むということは絶対にありません。それが一カ月も二カ月も、場合によっては一年も続くのです。

また、わたしは、今回の修行で三十一日間食事というものを取りませんでした

が、食事を取っている他の修行者と同じ修行を支障なくこなしています。

「今回の修行では、神通力が使えて、煩悩捨断(しゃだん)のできている成就者を出す。」

極厳修行に当たって、尊師はこうおっしゃいました。その言葉のとおり、修行中、わたしは多くの神秘的な体験をさせていただき、それとともに刻一刻と自分が人間から離脱していっているという実感がありました。

解脱とは、人智の進歩です。

わたしの修行中の記録から、特にクンダリニー・ヨーガのプロセスをたどってみましょう。

◉飛躍的に高まる霊性

●十二月十三日

今日から修行に入る。尊師が選ばれた四十人の修行者が、クンダリニー・ヨーガの成就を目指して極厳の修行に挑戦する。幸運にも、わたしもメンバーに入る

ことができた。決まった以上全力でやろう。なぜかわたしは、普段の修行はおろそかにするくせに、こういう極厳修行というと断然やる気になる。
場所は、第二サティアンの二階。尊師がいらっしゃる三階のすぐそばで修行できるなんてうれしい。恵まれた環境が与えられたことを感謝しよう。
荷物を携えて道場に来てみると、もう既にワークの引き継ぎを終えた人たちが修行に入っていた。
正悟師※から修行スケジュールについて説明を受ける。今回の二十四時間の極厳修行は、一日四時間の経行、六時間のヴァヤヴィヤ・クンバカ・プラーナーヤーマ、三時間の究竟の瞑想、一時間の食事時間をとって、残る十時間はひたすらツァンダリーの瞑想の詞章を唱えるというものだ。
午前三時半修行スタート。
午前四時の経行——手が凍えてカウンターが持てない。上九一色村の冷え込みは厳しい。寒いときには、氷点下十九度まで下がるそうだ。水のタンクも凍っ

※マハー・ムドラーの成就者は、正悟師と呼ばれる。

ていて使いものにならない。

朝方、尊師が来られる。とにかく、速く速くマントラを唱えること。マントラが遅いのは自己の中に煩悩的なけがれがあるせいであり、このマントラのスピードが成就のスピードとなるということ。

●十二月十五日

クンダリニー・ヨーガの成就の決め手について、尊師よりアドバイスがあった。喜覚支をすること。雑念に集中せず、ひたすらなすべきことをなす。離愛著（りあいじゃく）・現世捨断をすることが大切とのこと。

この現世捨断というのは、食べること・飲むこと・眠り・怠惰などをも捨て断つことを指すという。そして眠りをシャットアウトすれば、変化身の体験が起こるはずであるとのこと。

結局、成就って死の体験をすることなんだと思う。わたしがあの伊豆の海で経

験した死の経験——あのときはわずか四、五分の経験だったけど、あの経験を今回の修行でもう一度、今度は時間をかけてたどることが解脱への道なんじゃないだろうか。

もうわたしは死ぬのは恐くない。不放逸（ふほういつ）に徹して、早く修行の結果を出そう。そのために明日からは食事と水を抜いてみよう。そうすれば早く死の体験ができるだろう。

●十二月二十日

瞑想中、座法を組むといきなり身体がフワフワ浮き上がるような感覚があり、すぐにこの肉体の感覚がなくなってしまう。そして、内側に、非常に微細な快感そのものといった、別の存在が感じられる。自分がなくなってしまったのではないかと驚いて、自分の存在を確かめるために呼吸をしてみた。

息をすーっと吸い込むと、その内なる快感の身体——微細な身体がそれに呼

応して微妙に震える。吸い込んでいる空気の感覚も通常と違い、喉から胸にかけてトロトロと何か濃いハチミツのような液体が流れ込んでくる感じがする。この瞑想状態は、全体として今まで経験したことのないもので、自分が微細な快感そのものになったという感じ。この肉体で経験するものとは明らかに異質であり、はるかに微細な快感としか表現できない。

尊師にお伺いすると、第二静慮(じょうりょ)であるとのこと。そして、「あと一週間もしないうちに成就するぞ」とおっしゃった。そしてその後、「しかし、修行は続けなくちゃならない、固めなくちゃ……」と独り言のようにおっしゃった。

断水の方は、四日目で一応ストップ。喉の渇きはないから、条件が違ったらもうしばらく続けられそうだが、唇と口の中が乾いてマントラを唱えているとき気になってきた。修行の妨げになるようなら飲む方がいいと思う。

尊師にお伺いすると、水分はとりなさいということ。食の方は食べたくなるま

でこのまま断食を続けよう。

●十二月二十三日

瞑想中、身体がフワフワするという、内側の風がよく感じられる状態が続いている。身体にエネルギーが満ちているのがわかる。

尊師は、ほとんど毎日わたしたちの様子を聞きにきてくださり、一人一人の状態を確認し、アドバイスや励まし、質問に答えてくださる。

なんて恵まれた修行環境だろう。

今日尊師は、「アストラルに飛ばされる人は情報に弱いんだという認識をしなさい」とYさんにアドバイスしていた。そして、修行の経験については、そこで止めないで修行を進めた者が早く成就するとおっしゃった。

とにかくわたしたちが目標とすることは、二十四時間の修行メニューをどこまで完璧にできるかということ。それ以上もそれ以下もない。

今のわたしの状態は、意識も連続しているし、瞑想状態も悪くない。特に経行修行の効果を感じている。一日二時間の経行を二回、このとき全力でやって、足の裏から全身にトゥモ（熱のヨーガ）を起こし、その後、究竟の瞑想に入ったとき、色々な体験がある。

やはり尊師の組まれたプログラムは、成就するための完璧なものであるに違いない。問題は、わたしたちがどれだけそれを消化できるかということだけだと思う。夜中の経行のとき、寒さに負けて少し早目に帰ってきたりすることがある。注意しよう。

●十二月二十五日

瞑想中、左上方からぱーっと明るくなった。これが二度続く。瞑想中だけでなく、普通に詞章を唱えていても左側がすごく明るい、はじめは、わたしの知らないうちに部屋の蛍光灯を二つ三つ付け加えたのだと思ってしまったほどだ。

死の扉をくぐって



瞑想中、完全に自分の内側が充足した状態を体験する。エネルギーと微細な熱とで満ち満ちているという感じ。内側の感覚が鋭くなり、内側の風の動きがよく感じられる。二十日の第二静慮と言われたときは、微細な快感そのものを感じたが、今回は快感というより喜びが大きいという感じがする。

わたしたちは、瞑想によって内側の世界を知るわけだけど、この体験は、自分の内側には自分の知らない自分があるのだと教えてくれるものだ。わたしが自分だと思っているこの外側の自分以外の自分が、多層になって存在しているのではないかと思う。わたしの中のわたしに出会う……そんな感じがする。しばらくすると聴いたことのない音楽が上から降ってきた。

午後の瞑想中のこと、電話回線を通したような感じで人の話し声が聞こえる。どこでだれが話しているかもわかる。内容はサマナの他愛ない噂話。そのうちに音楽が降ってくるように聞こえてきて、気がつくと究竟の時間が終わっていた。

このような人の話し声が聞こえる体験について、幻聴と天耳通との区別を尊師

にお伺いすると、天耳通の場合やはり音楽を伴うとのこと。神々の声が聞こえたり、神々と自由に話ができるようになると完全な天耳通だという。まだまだ修行の先は長い。

●十二月二十六日

瞑想中、背中に意識を集中してエネルギーを上昇させる。するとエネルギーと共に意識が上へ上へと上がっていき、自分の背丈の五倍くらいになる。上にいくほど光があるようだ。右後方から光が射してきた。

ヴァヤヴィヤクンバカ・プラーナーヤーマ中、なかなかクンバカが限界までできなくて、こんなことをやっていてもし解脱できなかったらどうしよう、という思いがわいてきた。これで解脱しないで、グルのいない世界へ行くことになったら……と思うと涙が出て止まらなかった。絶対に解脱して尊師についていかなくてはならない、と強く思う。

現世での長い生活を振り返る。よくもまあ、グルなしの世界にいたものだ。

●十二月二十九日

二日ほど前、強い光が右側から射し込んできた。それが二度起こる。それからというもの瞑想空間がただただ明るい。瞑想していない普段の状態でも辺りが明るいのだが、今日になって、明るいなという感じと、ふっと暗いなあという感じの二つがある。

道場に来られた尊師が、「おや、デュパが無明に……」と指摘されたので、明るさと暗さが見えることをお話すると、「その暗さが無明なんだよ」とおっしゃる。「ああそうなのか、この無明がわたしたちが迷妄に陥る原因なんだな」と納得。

瞑想中、瞑想状態に入ったと思ったら一時間が終わってしまった。眠ってしまったとは思えない。尊師は、無所有境であるとおっしゃった。

●十二月三十日

ここまで順調に修行を進めてきたと思う。ところが今日は、思いがけず大きな心の乱れがあった。

修行をしているところへ、わたしにとってはわかりきったワーク上のことが質問されてくる。以前二度答えたことなのに、また同じことを聞いてくるのは、わたしの答えを信用していないせいだ。そう思うと腹が立ってくる。経行中もその感情にとらわれて集中できない。それどころか、それに派生していろいろな悪感情が出てくる。どうしても感情が波立ってしまう。ここまで修行を進めてきたのに、台無しになってしまった。また最初からやり直しかと思うと、ヴァヤヴィア中、頭を抱えて泣いてしまった。とても修行に力が入らない。

究竟の時間になったので、とにかく自分をとらえているこの感情について考察してみなくてはと瞑想に入った。

自己のプライド、怒りについて一つずつ考え、何とか脱却しようとする。する

と、その考えとは関係なく、今まで経験したことのないほど強烈なエネルギーが胸に昇り立ってきた。エネルギーは胸の周囲に留まり、胸全体をぐいぐいと強く締めつける。その状態がしばらく続き、次に内側に生起していた様々な感情――これは瞑想中は視覚的には、黒い重りのようなものがぶら下がっているように見えた。これが、エネルギーの締め付けによって、刃物でスパッと切り落としたように、一瞬より早く、すべて落ちてしまった。

落ちてしまうと、波立っていた内側がピタリと治まり、そこには不動の自分があった。

尊師がいらっしゃったので、この経験についてお聞きすると、エネルギーによって感情が変化するという、これはクンダリニー・ヨーガの一つの悟りの状態であるとのことだ。悟りというものは、何か漠然としたものであるかのように思っていたが、このようにはっきりと認識できるんだな。

一九九一年も、もうおしまいだ。

世の中の人々は、忘年会だ正月だといって、付き合いや楽しみに明け暮れている時期。わたしは、こうして極厳の修行をしている。確かに修行はつらいこともあるが、その結果得られるものは、何に代え難い。

修行によって、わたしは肉体的にも精神的にも大きく変化しているのがわかる。そして、その変化は人間を超えていくものだから、変化というより、より高い存在への脱皮といった方がいいだろう。

本当に、なんてわたしは恵まれているのだろうか!

わたしは、食べるために働く必要がない。世間的な付き合いということも一切必要がない。尊師が修法（しゅうほう）された最高の食物を食べ、自己の霊性の向上と心の成熟だけを求めてひたすら修行できる。現世的な価値で計れば、お金も地位も名誉もないけれど、わたしたちは、すべてを持っているといえるだろう。

こんなに素晴らしい環境を与えてくださって、尊師、本当にありがとうございます。

●一月一日

瞑想中、いつもより強く身体が固定され、一面白っぽい光に包まれた。その数秒後同じ体験。次には同じ光が今度は右側から押し寄せるようにやってくる。光への没入と表現できる体験だ。

瞑想中、自分の肉体というか、外枠が突然パーンと音を立てるようにして破裂した。そして、内側の意識だけがふわーっと上昇する。上昇する間、視界というか、周囲が非常にまぶしく明るい。

●一月三日

地下で修行していた他の二人が、捨断の瞑想を終えて二階へ戻った。たった一人で座っていると、心が寂静へととけ込んでいく。軽くて広い心の状態。目を開けると、辺りがキラキラと輝いて見える。光に満ちた空間。もう何もいらない——そんな気持ちがする。

雑念もなく、時間の流れも止まっている。

この延長に、ニルヴァーナ――涅槃があるとするならば、戻ってはきたくないと思うだろうな、そんな気がする。

● 一月九日

瞑想中、突然、強烈な光の渦巻いている空間に意識が投げ出された。

これまでの光の経験は、光が来て、光に包まれるというパターンだったが、今回は、いきなり強い光の中に投げ出され、その光の渦に巻き込まれる。まるで、自分が光の中にとけ込んでしまいそうで恐怖さえ感じた。光の色も、いつもは白い蛍光灯の色だったのが、今回は、少し黄色、黄金色が混ざっていたと思うが、恐怖があったため記憶に鮮明さがない。

尊師は、ラトナサンバヴァの光に没入している状態、と教えてくださった。

●一月十二日

音楽が聞こえてきて、ヨーロッパの都市の広場の光景が広がる。以下、鮮明なストーリィが展開する。その中でわたしは明らかに一匹の犬だった。登場する人間は人間として行動しているが、犬は、形状・容姿は犬で、人間がいないとき、犬同士のときには人間の言葉を話す。ただし、わたしは自身は、犬のつもりは全くない。

瞑想中、意識がすっと上昇して肉体から抜ける。そして、抜けたところから、またすーっと横へ抜けていく。すると次に明るい世界が見えてきて、二人の男が旅をしている場面。一人の男は、わたしだとわかる。何者かを追いかけているのだが、詳しいことはわからない。

普通に修行している状態でも、視界が透明光で明るくなる。

瞑想中、空間が暗くてよく見えないなと思うと、わたしのアージュニァー・チァ※クラから、ピカーッと光が発射されて、辺りを照らし出したのには驚いた。

●一月十七日

今日、一カ月と一日ぶりに食事をする。

三、四日前から食欲が生起しているのがわかって、食事をとった方がいいか、尊師におうかがいすると、

「断食するための修行をしているわけではないから、だいたい一カ月が限度だよ、欲しくなったらとりなさい。」

ということなので、食事をした。

一月五日に信徒さんが修行に入っていて、毎日、イニシエーションがあり、わたしもそれを受けていたので、その期間は完全な断食ではない。しかし、それにしても修行の力というのはすごいなと思う。ヨーガ行者の中には、何年間も食べ

※人間の身体にある霊的センター。

ない人がいるという、かつては本当かなと疑っていたが、今ではそれを信じることができる。

人間は、食べなくても生きていけるのである。

これは、すごいことだ！

◉立位礼拝――エゴとの闘い

クンダリニー・ヨーガの霊的プロセスは、順調に進んでいました。ところが、この修行中、出家修行者としての規定である六百時間の立位礼拝と、教学の十課までを終えるようにとの指示があったのです。わたしは、礼拝は、規定時間にあと二百五十時間足りず、教学は六課までしか終わっていませんでした。これを終えるのに、少なく見積っても二十日はかかります。

「みんなに遅れをとる。」

と思いました。このとき、わたしは修行進度では三番目にいました。それまでは、

気がつきませんでしたが、やはり成就の順番を争う気持ちがあったのでしょう。

「それだけ長く修行させてもらえることを感謝しよう。」

こう気持ちを切り替えて、その日から礼拝に入りました。

この立位礼拝は、完璧な行法であるだけに、とても厳しい行です。大きな声を出す、すばやく五体を投地する、これを一日二十時間続けることは、本当に自分のエゴとの闘いです。約十四日間の礼拝は、わたしにとって、やはりつらいものでした。

「空っぽの自分が欲しい。淡々と礼拝できる無私の自分が欲しい。」

何度もそう思いました。修行のつらさにやめようかと思ったこともありました。ただ、修行をしていると、ほんの一瞬ですが、グルの世界、グルの持っている光にふれることがあるのです。そんなときは、心から敬けんな気持ちがこみ上げてきて、過去の自己の悪業や、帰依のなさを、心から悔いる気持ちがわいてきます。しかし、心というものは弱いもので、またすぐに目の前の苦しみから逃れようと

する。わたしの十四日間の礼拝は、この繰り返しでした。
しかし、この間、地獄の世界を見るという、貴重な体験もしました。

◉戦慄の地獄の世界

●一月二十七日

瞑想に入ると、細かい黒い網点のようなものが見える。その網点の向こうに、何かヴィジョンが見えるので、網をくぐって見ると、それは地獄の世界だった。
そこは、意外と明るいというか、地獄の住人の赤くただれた肌とかが細部までよく見えて、色も鮮明なために〝明るい〟と感じたのかもしれない。
今回は、地獄の世界の中には入らず、終始、上空から見ていた。
苦しみだけの世界――という表現があるが、本当にそのとおりだ。苦しみと痛みの叫び、地獄の責め苦だけが、赤裸々に続いている世界。一般にいう地獄絵そのままの光景が広がっている。お寺で見る地獄絵は、長年そこに掛けられてい

るせいか、すすけたりして薄暗い印象があったけれど、現実の地獄はもっと鮮明だった。おそらく、苦しみも痛みも鮮明なことだろう。

わたしが見たのは、いろいろな形の責め苦を行なっている地獄だったが、それを上空で見ていて感じるのは、その世界の何とも表現できない臭いだ。生臭いという表現も違う――ちょっと表現できない臭いがしたが、これまで他の人の地獄を見た体験で、この臭いにふれたものは読んだことがないので、わたしの体験が本当のものかどうか、尊師におうかがいした。

「臭いはあります。その体験は正しい体験です。その体験には二つの意味がある。一つは、君の修行が進んで、死生智の智慧の一つを経験しているということと、もう一つは、君が下向した場合に行く世界だということだね。」

十四日間の立位礼拝も、あとわずかというところにきて、なぜか苦しくて礼拝できなくなり、もうドロップアウトしようかと弱気になっていたのを、見事、尊師に言い当てられてしまった。

◉アンダーグラウンド・サマディに入る

二カ月に及ぶ修行も、終わりに近づいている感がありました。記憶修習するべき瞑想も、グルヨーガ、大乗のツァンダリーと終わり、クンダリニー・ヨーガの判定基準である四つの条件——意識の連続性、光への没入、化身の体験、空中浮揚も、順調にクリアしてきたように思いました。

ところが二月に入って、わたしは、既に切れていると思っていた食の煩悩にさいなまれ出したのです。三十一日間の断食の後、食事の量がどんどん増えていて、止められない状態になっていたのです。

そんなとき、アンダーグラウンド・サマディに入れという指示がありました。

一月の状態と比べたら、貪りは出ているし、意識も外側に向いているしと、コンデションは最悪。とても四日間のサマディなど考えられない状態でした。

「どうしよう。サマディになんてとても入れる状態じゃない……。でも、わたしの今回の修行は、もう終わりのような気がする。また次のステージを目指すため

に、早くワークに戻って徳を積みたい。まあ、グルが入れとおっしゃっているのだから、何とかなるでしょう。」

こうして、わたしは、噴出していた食の煩悩を捨断できないまま、目をつむるような思いで、四日間のアンダーグラウンド・サマディに入ることになったのです。

◉地獄・餓鬼・動物――三悪趣の体験

地下に埋められたチェンバーの中――それは不思議な空間でした。

普通の暗い部屋にいるのとどう違うのか、と問われれば全く違うと答えるでしょう。やはり、そこは人間が死後体験するバルドーに近いのだと思います。

例えば、自分の中に内在するデータがありますが、それがチェンバーに入ると、時速一五〇キロの剛速球をガツンと頭にぶつけられたようなショックで、自分に迫ってくるのです。

「煩悩は、捨断しておいた方がいいわよ。」

サクラー正悟師も、ご自分の体験を踏まえておっしゃっていましたが、わたしのチェンバー体験もその一言に尽きました。

まず最初に、膝の痛みで蓮華座が組めなくなりました。二カ月の修行で、座法は安定し長時間蓮華座が組めていたのに、チェンバーに入った途端に組めなくなりました。それでも、何とか二日目までは、崩れながらでも座っていました。ところが、二日目になって、楽しみのヴィジョン――わたしの場合スイスイとスキーで滑走している場面が出てきて、その後、ものすごい怠惰になってしまったのです。眠気はないのに、「とにかく横になりたい」という欲求が出てきました。「何てことだろう！　神聖なサマディのチェンバーの中で横になって寝たいなんて。」

情けないのを通り越して、驚きました。なぜなら、わたしは、修行に入るとすぐに、眠りたくない横になりたくないというのが普通だったからです。そのわた

しが、肝心要のサマディに入って、こんな欲求が出てくるなんて！
ところが驚くのは早すぎました。
動物のカルマで怠惰になっただけではなく、あれが食べたい、これが食べたいと、現世で修習したいろいろな食べ物とお店が次から次へと出てくるのです。それも、一五〇キロの剛速球の例えのとおり、迫ってくるデータの威力が普通ではないのです。それは、苦しいものがありました。
結局、チェンバーの中で、わたしは自分の三悪趣（さんあくしゅ）のカルマを、身に染みて証智（しょうち）したのです。今生そんなに大きな殺生があるわけではないと、自分では思っていました。ゴキブリも殺さないで逃げ回っていたほどなのに、地獄のカルマに苦しみました。食についても、わたしは普通の人より食べることに頓着しない方で、できれば食べないですませたいと思うタイプだったのです。
痛みという地獄のカルマと、横になって何もしたくないという動物のカルマ、そして食の貪りという餓鬼のカルマ――〝三悪趣〟とはよくいったもので、この

三つはセットで出てきて、抜けられない仕組みになっていることを思い知りました。つまり、痛みに耐えて修行しようと思っても、動物のカルマである〝妥協〟の心によってそれができない。貪りのカルマで食べ物のビジョンが出てきたとき、捨断するべきなのに、やはり動物のカルマによって、出てくるビジョンを楽しんでしまうといった具合です。これでは、カルマから脱却できないのは当然です。

「ああ、これじゃあ、知り合いはみんな三悪趣だな……。」

自分のカルマを証智することは、他のカルマも理解できるということです。チェンバーの中で、自己の三悪趣のカルマと対じして思ったことは、この人間界の魂のほとんどが、三悪趣に落ちるだろうということです。

「もう二度と、悪いカルマを積まないぞ。」

わたしは、心に誓いました。

そして、煩悩に苦しんだ四日間のアンダー・グラウンド・サマディも、やはり一般の人よりは酸素消費量が少なかったらしく、無事チェンバーから出ることが

できました。その日、わたしはクンダリニー・ヨーガ成就者として、オウム真理教の正師として認められたのです。

◉人間の存在そのものが哀しい

今、わたしが死んだら、絶対に動物に転生するという確信があります。

このように、ありのままに自分を見つめられるということは、素晴らしいことです。解脱によって、わたしの心は、今、大きな楽を感じています。しかし、同時に、何ともいえない哀しみも感じています。

人間という存在そのものが、哀しいものに思えるのです。

人は、みんな幸福になりたいと思って生きています。しかし、人間界は、何一つ確実なもののない無常の世界だから、人間である限り幸福にはなれないのです。

解脱する以外に、人間を超える以外に、わたしたちが幸福になる道はないのです。

この地上の生き物すべてが、その生のからくりを知りません。

なんて哀れなんだろう。
まるで、夏の夜、明りにひかれて、飛び込んだ火に身を焼かれる虫たちのようなものです。幸福を求めて生き、幸福だと思った幻影によって、最後は身を焼かれ苦しまなくてはならない。これがわたしたちの生そのものなのだということを、多くの魂に気づいてほしい。そして、早く早く、本当の幸福をつかんで欲しいと思います。

信も帰依もない不肖の弟子を、ここまで見捨てずに導いてくださったグルには感謝の言葉もありません。今後は、この偉大なグルの恵みを、一人でも多くの人に伝えること、そして自己の修行に精進していきたいと思います。

グルメよりも、ファッションよりも素晴らしい
たどり着いた真実の幸福

タントラデュパ正師と共に、現在オウム真理教の編集部門で活躍しているのが、タントラバッター正師である。

出家する前は、仕事はバリバリこなすキャリアウーマンだった正師。ブランド物の衣服に身を固め、グルメを楽しみ、目白のマンションに一人暮しという華麗な生活を送っていたという。

そんな正師が、オウム真理教の教えに巡り合い、修行の道を選んだ。そして、今、彼女は「クンダリニー・ヨーガの成就」という宝を得て、至福の中にいる。もろく不安定な物質的な幸福よりも、もっと素晴らしいもっと絶妙なる幸福——その世界を記したタントラバッター正師自身の手記を、最後にご紹介しよう。

◉新しく「**誕生**」したわたし

二月十一日、早朝の富士の裾野(すその)。踏みしめている大地は、間もなく到来する春の息吹を秘めながら、今はまだ硬い鎧(よろい)をまとって凍りついている。緑の芽を覆っ

て立ち枯れている背の高い野草も、吹き抜ける刃物のような風にカラカラと乾いた音を響かせている。野鳥の羽音が白々とした空に吸い込まれ、雪をいただいた山は地肌を青っぽく染め、すべてのものが、張りつめた空気の中に、二度と絵筆が乗ることのない完成された絵のように、威圧感さえ漂わせてそれぞれの位置を占めていた。

わたしは、その荒涼とした風景とそぐわない、温かく満ち足りた思いを抱いて足元の一点を見つめて立っていた。そこだけ掘り起こされ、盛られた土の下には、わたしがつい数時間前までの四日間を過ごした三メートル四方の空間があるはずだった。そして今、その中には、クンダリニー・ヨーガの成就のための最後の修行である四日間のアンダーグラウンド・サマディに挑んでいる法友がいるのである。

その法友の修行の成就を祈りながら、チェンバーが埋められている周りを歩き出したとき、突然、富士山の稜線(りょうせん)のちょうど中腹の辺りから強烈な光線が発せら

れた。あまりのまぶしさに、わたしは少しの間、目をつぶらなければならないほどだった。——朝日だった。雄大な山に遮られた朝日が、ようやくその光をあまねく地上にゆきわたらせたのだ。するとどうだろう。大地も、空も、風も、山も、草も、重苦しい呪縛から解き放たれ、キラキラと輝き始めたではないか。その光景は「誕生」という言葉を思い起こさせた。同時に、わたしの中に、自分は麻原尊師の放つ愛の光を得て生まれ変わったのだという思いが強く強く迫ってきた。

そうだ。わたしこそ、真実の命を自らに吹き込んでくれる光を待ち望んでいた者だったのだ。そして今、その輝きを身に受けて「誕生」したばかりの自分を、わたしははっきりと自覚した。

わたしの心は、透明で静か、それでいて歓喜に満ちているという、かつて一度も得たことのない平安の境地にひたっていた。



◉人生を振り返って

一九八六年、秋。いつものように後輩の社員が退社した後、部屋にはわたしと同僚のTが残された。締め切りに追われる仕事をいくつも抱えていたわたしは、毎日のように夜遅くまで残業をしなければならなかった。十時前に仕事にけりがつくことはほとんどなく、夜中の二時、三時までかかることも珍しくはない。そしてTも、社員七名の編集プロダクションを支える働き手として、多くの仕事をこなさなければならない立場にあった。

ビルが面しているにぎやかな商店街を行き来する人も途絶え、時折通る人の足音が耳につくころになると、さすがにペンを握る手も痺れ、目も疲労してくる。そんなとき、どちらともなく声をかけて、ちょっとした雑談を交わして息抜きをするのだが、その日はTの方からわたしに話しかけてきた。

「宇宙がどうしてできたか、知ってる?」

どうやら、彼お得意の神秘的な話題らしい。

「ううん。『宇宙はどうしてできたんだろう』『もし、この宇宙ができてなかったとしたら〝わたし〟は今、どうしていたんだろう』って考えると、わたしもない、地球もないっていう『無』という問題に突き当たるでしょう。小さいころから、それを考えていると夜も寝られなくなって、そのうちにものすごく怖くなってしまったから、その問題はずっと避けてきたのよ。」

「怖くなるっていうのはよくわかるな。魂の根源的な記憶と強くかかわっている問題だからね。」

「えっ、どうして？」

「宇宙物理学に『ビッグ・バン理論』というのがあってね……。」

Tは、まず現代の宇宙物理学の主流をなす「ビッグ・バン理論」について説明をし始めた。科学音痴のわたしにはよくわからないところもあったが、どうやら、この宇宙は針の先ほどの小さな小さな存在が、何かをきっかけとしてものすごい爆発を起こして以来、どんどん膨張し続けて現在に至っているらしいこと、そし

て、初めの大爆発を起こした原因について、様々な仮説が立てられて研究が続けられているという程度のことはわかった。
「そしてね、現代の科学を結集してもわからない、その大爆発の原因が、実は何千年も前のヨーガの教えの中に説かれていたんだよ。」
いよいよ、彼の本領発揮である。
「人間も含めたすべての魂の本質は、『真我(しんが)』と呼ばれているんだけど、その真我はね、自由・幸福・歓喜の状態でニルヴァーナという、これ以上にない素晴らしい世界に安住していたんだ。ところが、一見するとものすごく綺麗な三つのエネルギー――これは『三グナ』っていうんだけど――に幻惑されて、下の世界に落ちていったんだよ。
この、落ちていったっていうのは、何もなくてもそれだけで満ち足りていた真我が、どんどん経験を重ねて、より具体的な物質を必要としていくプロセスなんだ。その結果、この粗雑な世界、つまり、今俺たちが生きている世界ができたん

だよ。その、三グナと真我との最初のぶつかり合いが『ビッグ・バン』なんだ。
そしてね、真我は落下していく途中でたくさんの悪業を積んだために、自分の周りにいろんな色のペンキを何回も何回も塗ったように、真実が見えなくなってね、とうとう自分たちが本当は完璧な存在で、ニルヴァーナにいたということを忘れてしまって、一人ではそこに帰れなくなっているんだよ。」
「それじゃあ、真我がわたしの本質だとしたら、わたしがわたしだと思っているわたしは本当のわたしじゃないわけ？」
「そうだよ、真我こそ絶対的な自分なんだ。でね、その汚いペンキをそぎ落として、真我本来の状態に戻ることが『解脱』なんだ。
……ああ、俺も解脱したい！」
ため息混じりに天井を見上げたTを前に、わたしは足元をさらわれたような気がした。
（わたしはわたしを信じていたし、人間を信じていた。でも、それが本当のもの

でないなら、そんなあやふやな存在を信頼していいんだろうか？　間違いのない、悔いのない人生を送るためには、絶対のものをよりどころとするべきなんだから……。だったら、わたしは何を信じて生きていけばいいのだろう。）

これまでも、Tから聞いた精神世界の話から自分の生き方を考えさせられたことは度々あった。しかし、このときの話ほどわたしを立ち止まらせたものはなかった。宇宙の創造のことも含めて、Tの話していることはおそらく真実だろう。だからこそ、わたしはわたしのこれまでの生き方を振り返らないわけにはいかなかったのである。

◉〝本当の自分〟を知りたい

そのころ、わたしが描いていた幸福な人生、それは、納得のできる職業に就き、その職業を全うすること、経済的に豊かであること、そして、毎日が退屈でないこと、さらに、愛する家族や友人たちに囲まれて暮らしていくことだった。

そういう意味では、わたしは非常に恵まれていたといえるだろう。好きな編集の仕事に携わり、今では会社で一目を置かれる存在となっている。同年代の女性と比較してかなり多くの給料を得ていたため、経済的な不自由を感じることはなく、自分名義のマンションを持つことさえできた。確かに仕事に追われる毎日だったが、仕事そのものに不満はなかったし、その仕事が豊かな生活を支えてもいた。暇ができると友人たちと語り合ったり、読書にふけったり、ゴルフクラブに通ってみたりと、興味の向くことに時間を費やした。グルメ、ファッションなどについても人並以上に気を遣い、一流・最新といわれるものを常に選んでいたせいか、友人たちには食通で趣味がいいと通っていた。

しかし、これは「自分が信じたことをすることが、一番の幸福」「人はそれほどバカじゃない」という、自分自身、そして一般の人の判断に信頼を置くからこそ成り立つ幸福観である。もしそれが根底から崩れ去ってしまったら、つまり、自分の判断が信頼できないものとなってしまったら、「納得のできる職業に就く」

ということ一つとっても、非常にあやふやなものになってしまう。なぜなら、「納得」しているのは本当の自分ではなくなってしまうのだから。

わたしは、わたしの人生を最高に生きるために、本当の自分を知りたいと思った。そして、解脱のための修行をしているというTが大きく大きく見えた。

◉清らかな世界へのあこがれ

その後もTは、折に触れ彼の入信しているオウム真理教の教義に基づいた様々な話をしてくれた。もっとも、彼は現世的なわたしが修行をするはずもないと思い、入信を勧誘することはなかった。ただ単に、探し求めていた真実をやっと見つけたという喜びを抑えきれず、わたしを手ごろな話し相手にしていたのだろう。

しかし、彼の口から出てくるオウム真理教、そして麻原彰晃尊師の像は、次第にわたしの心にその蔭を濃くしていった。

宇宙の構造、輪廻転生、カルマの法則、チァクラ、クンダリニー、解脱のプロ

セス、シャクティーパットなど、どれもが具体的・実践的で、真実味を持っていた。そこに行けば、きっと本当のことがわかるに違いない——。そう思いながら、わたしにはその清らかな世界に飛び込む勇気がなかった。いや、その資格がないと思い込んでいたといった方が適切かもしれない。

真理を知らなかったとはいえ、それまでのわたしの生き方は、魂を下降させるものでしかなかった。食欲・性欲・プライドなどの煩悩を満足させるための人生を送っていたといっても過言ではないだろう。そして真理の片鱗に触れた今、わたしは、とんでもない悪業を積んでしまったことに戦慄せざるを得なかったのである。

◉過去の悪業

それは、大学を卒業して就職し、早く一人前の編集者になりたいという一心で仕事に熱中していた数年が過ぎ、ある程度心に余裕が出てきたころのことである。

改めて自分の周囲を見渡すと、仲の良かった友人たちはほとんどといっていいほど結婚をし、早い人では母となっていることに今さらのように気がついたのだ。それまで結婚に全く興味がなかったわたしだったが、彼女たちの満ち足りた表情に接する度に、羨望を覚えないわけにはいかなかった。そんな折、ある男性から交際を申し込まれ、わたしは深く考えもせずその申し出を受け入れることにした。

相手にひかれたのではなく、恋人として交際し、結婚できるということにひかれて始まったおつきあいだった。そのせいか、わたしは彼がどういう人なのか、何を考えているのかということには全く無頓着で、ただ、自分がちやほやされることに満足していた。わたしは、彼を相手に、理想的な恋人を演じることに夢中になっていたのである。それは十分にわたしの欲望を満足させ、自分は幸せだと信じこませることができた。

しかし、その幻影が打ち破られるまでには、それほど時間はかからなかった。気がついたとき、わたしは妊娠していたのである。

そのとき、わたしははっきりと思い知った。わたしは彼を少しも愛していないということを。彼と結婚したいと思ったのは、単なる見栄からであり、人生を分け合う相手として彼を選んだのではなかったのだということを――。そして、それがどんなに自分の心に傷をつくってしまうかを知らないままに、わたしは中絶を選択した。

目を覚ますと、そこにはうつろな心のわたしがいた。もう、何も考えたくなかった。すべてを忘れてしまいたかった。見舞いに来てくれた彼の顔も見たくなかった。問いかけられたことに首を振って応じるのもおっくうだった。何を話しても反応のないわたしを扱いかねて、彼は病室を出ていった。出がけに掛け布団を整えてくれた彼の心遣いさえ、わたしにはいとわしかった。

翌日、迎えに来てくれた彼の顔を見たとたん、わたしの胸には押さえようのない感情が渦巻いた。なんてかわいそうなわたし、なんてみじめなわたし、なんて

不幸なわたし……。涙が出た。押さえても押さえても涙はあふれ出て頬を濡らす。そのときのわたしには、おずおずと涙をぬぐってくれている、沈鬱（ちんうつ）な表情の彼のことはもちろん、誕生することなく消えていった魂を思いやる余裕はほとんどなかった。自分の悲しみだけがすべてだった。——そして、その日が彼と会った最後の日となった。

◉もっと早く知っていれば……

それからしばらくは悲しみにふさがれることもあったが、生々しい記憶が薄れるにつれ、以前のように仕事に没頭する日々が戻ってきた。しかし、わたしの心は完全に元に戻ることはできなかった。まず、物に対するこだわり、言い換えるのならば物欲が増大していった。また、人に弱みを見せたくない、人より劣っていると思われたくない、常にそういう思いに駆られるようになった。空虚さを、物を手に入れることで少しでも癒（いや）そうとしていたのだろうか。後ろめたさから逃

れたいと思っていたのだろうか。心を見つめることが怖くて、意識をどんどん外側に向け、常に刺激を求めるようになっていった。

数ある悪業の中でも、殺生は地獄へと通じる最も重い悪業とされている。仏教でもキリスト教でも、基本的な戒律の第一番目に不殺生（非暴力）が挙げられているほどだ。それほどの悪業を積んでいながら、どうしてわたしに解脱などできるだろう。いや、解脱どころか、来世は間違いなく地獄へ転生するだろう。心の底から、真理を知らなかったことが悔やまれてならなかった。もし、もっと早く、こんなにけがれてしまう前に真理に巡り合っていたなら、わたしもTと同じように解脱を求めて修行をしたであろう。だが、今のわたしには修行する資格などない。わたしは、勝手にそう思いこんでいた。

◉尊師を一目見たい

光に満ちた清らかな世界に入ること、つまり、オウム真理教に入信し修行をし

解脱することは絶対に不可能だと思い込んでいたわたしだった。しかし真理は、そんなわたしにさえ手を差し伸べてくれたのである。そのきっかけは意外に早くやってきた。

秋も深まったある日、いつものように残業の疲れをTとの雑談で癒していた折のことである。オウム真理教の救済活動の一環として、コンサートが催されるということを聞いたわたしは、そのコンサートへ行ってみようという気になった。入信することはできないまでも、最終解脱者だという麻原尊師を一目見たいと思ったのだ。完全に自己の自由を取り戻した人、すべての事象を完璧に理解でき、絶対の真理を知っている人、それは、いったいどんな人なのだろうという興味が、わたしをコンサートホールまで足を運ばせようとしたのである。

チケットを売ってほしいというわたしを、Tは意外そうな表情を浮かべて見つめた。わたし自身も、宗教に対してこんなに積極的な行動が取れることが不思議

でならなかった。

コンサート当日、わたしは残業をしなくてもいいように、わざと夕方に外出する用事をつくった。友人と会う約束があるときでさえ、めったにそんなことはしないのに、進んでそんなことをする自分には、我ながら驚いた。わたしは外出先からコンサートホールへ向かうタクシーの中で、まるで愛する人に会いに出かける少女のように胸を踊らせていた。赤信号の一つ一つが恨めしかった。開場に間に合わなかったらどうしようと、そればかり考えていた。

◉聖者

そのコンサートは「アストラル・ワールド・コンサート」と銘打っていた。「アストラル」という異次元で鳴り響いている音を、麻原尊師がこの現象の世界に引き下ろして作曲した「アストラル音楽」が披露されるのだという。

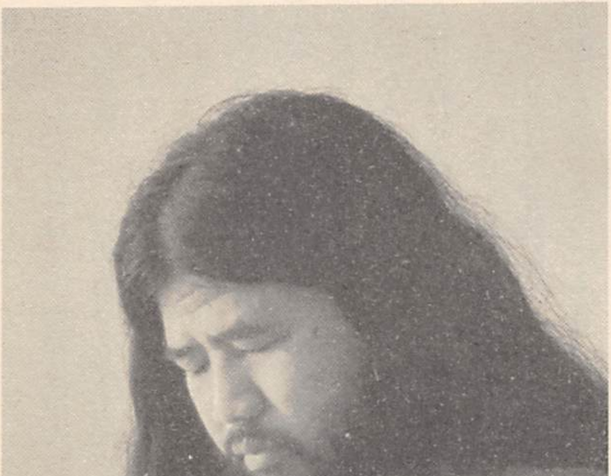
わたしが会場に到着したときには、すでに座席の大半は埋められていた。やっ

と空席を見つけて腰を下ろして辺りを見回すと、なぜか以前に会ったことのあるような気がする人がたくさんいて、不思議な安心感を覚えた。

間もなく幕が開いた。スポットライトを浴びて、白銀の衣を着た長髪の男性が蓮華座を組んでいる。その姿を一目見たとき、わたしの脳裏には「聖者」という言葉が浮かんだ。その方は、ゆったりと、しかし会場の隅から隅まで神経をゆき渡らせて、光の中に座っていらした。マントラを唱える、深みのあるよく通る声を聞いているうちに、自然と涙が出てきた。と同時に「やっと会えた、やっと会えた」という声が胸の中に響いた。

(なぜなんだろう、なぜこんなに懐かしさを感じてしまうんだろう。わたしとは無縁の世界の人のはずなのに、どうしてこんなに懐かしいんだろう。)

わたしは困惑しながらも、尊師の発するやすらぎに満ちたヴァイブレーションにすっぽりと包まれ、その心地よさにひたっていた。



◉迷い続けて

二時間後、わたしはほてった頬を冷たい風にさらしながら、駅への道を歩いていた。耳の奥底では、ついさっきまで聞いていたアストラル音楽のメロディーが鳴り響いている。しかし、それにはお構いなしに、

「どうしよう、どうしよう……。」

と、何度も何度も同じ言葉が口を突いて出てくる。

わたしは、さっきから同じことばかりをつぶやいている自分をもてあましながら、その反面、この逡巡(しゅんじゅん)は「オウム真理教には入信しない」という結論を下すことの恐怖から来ていることを十分承知していた。わたしはそのときになっても「オウム真理教に入信する」という選択は自分に許されていないのだとかたくなに信じていた。とはいえ、麻原尊師に会った今、はっきりと「入信しない」と決めてしまうことは不可能となってしまったのだ。したがって、ずっと迷い続けているしか術はなかったのである。

(後でゆっくり考えよう。)

わたしは、いったんその問題から逃げることに決めると、手を上げて空車を止めた。

「目白までお願いします。」

運転手にマンションの場所を告げると、わたしはシートに身を沈めた。今度は、耳の中で鳴り響いている美しい調べを堪能することができた。しばらくの間、清らかな音楽の数々を思い出していると、ふと、忘れていたことが甦った。コンサートの最中に、力強い男性の叱咤(しった)の声が耳元で聞こえたときのことをありありと思い出したのである。そのときは、すぐに振り向いてもだれもいなかったので空耳だと思ったが、それにしてはリアルな声だった。ひょっとしたら、異次元から聞こえてきた声かもしれない。だとしたら、あの「こらっ!」という声は、わたしの何を戒めていたのだろう——。思いはまた、神秘の世界へと飛んでいった。

◉異次元の笛の音にいざなわれ

数日後、わたしは決定的な体験をすることになる。その朝、いつものように目が覚めた後に眠りの余韻を楽しんでいたとき、突然、耳元で澄み切った美しい笛の調べが聞こえ出した。初めは隣から聞こえてくるのかと思っていた。しかし、窓を開けていないのだから、隣の物音は聞こえるはずはない。どこから聞こえてくるのだろう。わたしはぼんやりとそんなことを考えていたが、ふと、あることを思い出した。

それは、やはりTから聞いたことだった。修行をしてある程度ステージが上がっていくと、異次元の世界の音を聞くことができる能力が備わるということ。その異次元の世界の音も、最初は単なる音でしかないが、次第に音楽を形成するようになるということだった。

だったら、今聞こえているこの笛の音は、異次元の世界の音楽に違いない——。

そう思ったとたん、わたしに勇気が芽生えた。今まで漠然と考えていた異次元が

確かな存在として迫ってきた今、麻原尊師こそ真理であり、オウム真理教こそ真理であるという思いは揺るぎないものとなった。それなのに、目の前の、手を伸ばせば届くところにある真理を、どうして拒否しなければならないのか。たとえこれまでの人生でどんな悪業を積んでいたとしても、たとえ解脱できなくても、たとえ来世地獄へ落ちるとしても、絶対的な真理を拒んでいて、どうして納得のできる人生を送ることができるのだろうか。そうだ。大切なのはこれまでのことではなく、これからのことなのだ。わたしは真理をよりどころとして生きようと決意した。

◉素晴らしき真理の世界

こうしてやっとのことで入信を果たしたわたしは、仕事の合間を縫って道場へ通うようになった。少し前のわたしだったら、なんてみすぼらしいんだろうと眉をしかめかねないほど質素な道場は、いつ訪れても温かく、そして清らかなヴァ

イブレーションで迎えてくれた。
最初のうちは、どうしてこんなに居心地がいいのだろうと不思議だった。しばらく経つと、その居心地の良さの秘密は、そこに集う人たちの心の持ち方にあるのだと気づいた。信徒もサマナも、自己の成長のために各々のレベルにおいて修行をしていたが、それだけではなく、それぞれが他を思いやる心――仏教的な言葉を使うなら「四無量心（しむりょうしん）」というが――を培う努力をしていたのである。

他を思いやる心――。口で言うのは簡単だが、それを常に意識し、行動に表わすというのはなかなか難しい。特に、自己の不利益になってでも他を利することができる人は、現世においては皆無といっていいだろう。ところが、オウム真理教に集う人たちは、程度の差こそあれ、だれもが自己の利益はともかくとして、他を利する実践をしているのだった。
特にサマナの方たちの態度には驚かされた。わたしよりはるかに若い人たちが、

一日三、四時間の睡眠で、信徒や道場を訪ねてくる人への対応、あるいはもっと大がかりな救済活動のために様々なワークを行なっているのである。彼らとてまだ解脱前の若者である。苦しいこともあるだろうに、常に笑顔を絶やさずにきびきびと仕事をこなし、さらに道場を訪れる人の悩みや苦しみを吸収しようとする姿は、尊敬に値するものだった。

また、ケイマ大師（現マハー・ケイマ正大師※）をはじめとするクンダリニー・ヨーガの成就者の方々は、修行によって得た神通力と高い精神性をもって、多くの信徒の指導に当たっておられた。わたしも、大師方の神秘的な力によって、幾度も貴重なアドバイスをいただいた。

◉グル、麻原尊師

しかし、最もわたしを引きつけたのは、やはり麻原尊師、その人であった。尊師の説かれる法には、何の矛盾も感じられなかった。そればかりではなく、どん

※大乗のヨーガの成就者は、正大師と呼ばれる。

な疑問でも答えられないことはなく、しかもその答えは明快で論理的なのである。
また、尊師の救済者としての姿に接する度に、その愛の深さに胸が熱くなった。エネルギーは、川の流れのように高い方から低い方へと流れていく。尊師のように最終解脱をされた方ともなると、ただわたしたちと同じ空間にいるだけで非常なエネルギーロスとなる。にもかかわらず、尊師は、自らの生命を削るようにして、シャクティーパットなどのエンパワーメント（エネルギー移入）をしてくださるのだ。そこにあるのは、一人でも多くの人を高い世界へ導こうという大いなる愛の心であった。
あるときは優しく、またあるときは厳しく、わたしたちに本当の幸福への道を示してくださる尊師。直弟子はもちろん、何千人もいる信徒一人一人に常に心を砕いてくださる尊師。わたしは、すべてを委ねることのできる人に出会った喜びに、何度涙したことだろう。

◉解脱へのあこがれ

尊師や大師をはじめとして、サマナの方々、さらにたくさんの法友と接しているうちに、わたしも、貪りのない心、妬みやそねみのない心、何事にも動じない強い心、私心なく他を愛することのできる心、すべてをありのままにとらえられる透明な心を得たいと願うようになった。それには解脱するしかなかった。

かつては自ら犯した悪業ゆえにあきらめていた解脱であった。しかし、カルマは修行によって乗り越えることができることを知ってからは、他のために生きることができる魂に生まれ変わりたいという気持ちが徐々に徐々に芽生えていったのである。

仕事は相変わらず忙しかった。残業だけでは足りず、休日にも出勤しなければならないほどだった。しかし、わたしは以前のように仕事に生きがいを見いだせなくなっていた。一日のほとんどの時間が仕事に費やされていくのはたまらな

かった。
わたしは自分の心を磨くために時間を使いたかった。功徳を積むために時間を使いたかった。解脱をするために時間を使いたかった。だから、出家を決意した。
そのころにはもう、かつてわたしが必死に守ってきた暮らしは色あせ、何の意味も持たなくなっていた。仕事も、マンションも、一流ブランドの洋服も、ご馳走も、遊びも、どれ一つとしてわたしを引き留めることはできなかった。

◉快い修行生活

そうして迎えたサマナとしての生活。わたしにとっては快い緊張に満ちた日々の始まりだった。
ワークでは、正確さ、効率の良さと同時に、どれだけ集中しているか、心が救済に向かっているか、尊師を意識して行なっているかが重要になってくる。なぜなら、サマナのワークは単なる仕事ではなく、解脱に不可欠な功徳を蓄え、智慧

を磨き、強靱な意志の力と集中力を養い、解脱へ導いてくれるグルへの帰依を培っていくための絶好の機会なのである。

日々の生活でも、戒律を守ることで煩悩を捨断（しゃだん）、つまり捨て断ち、教学によって真理のデータを根づかせていく。瞑想をすることも欠かせない加行（かぎょう）だった。そういう繰り返しが、来るべき極厳修行で解脱していくための土台を築いていくのである。

わたしが配属されたのは編集部だった。現世での経験を最大限に生かせるセクションである。ワークも日々の生活も新鮮で、わたしは喜びをもって毎日を送ることができた。そしていつしか一年が過ぎ、わたしは三日半の極厳修行で、強靱な意志の力を土台とするラージャ・ヨーガの成就を与えていただいた。

その後も編集部でワークをする日々が続いた。オウムの出版活動は営利を目的としたものではなく、麻原尊師の説かれる真理の法や、オウム真理教を多くの人

に流布するための一つの手段として位置づけられている。したがって、必要とあればどんな事態にあっても本を作り上げたし、しかもそこには損得は全く働いていなかった。

そのワークを通して、わたしは現世で培った様々な観念の崩壊を体験した。一日に書くことができる原稿の量も次第に増えていった。ワークに集中していられる時間も徐々に増えていった。そして、他の魂の救済というグルの意思を全うすること、つまり帰依の心も培われていった。

◉極厳修行開始！

ワークの整理と引き継ぎを終えて、わたしが修行に入ったのは、一九九一年十二月十六日も終わろうとする真夜中だった。富士山総本部道場から修行場のある第二サティアンビルへと向かう車の中で、わたしはこれまでの三年間を思い出していた。出家当時から今の自分まで、果たしてどれほど修行者として成長できた

のか、わたしには判断できなかった。全く変わっていないような気もするし、反対に一八〇度違ってしまったような気もする。とにかく、これから臨む修行では、この三年間に培ったものしか役に立たないのだということだけはわかっていた。

プログラムは、瞑想（瞑想の修習）、特殊なプラーナーヤーマ、究竟の瞑想、経行に分かれていて、一日一時間の食事時間を除く二十三時間が修行に当てられていた。しかし、実際には食事を取らなかった期間も長かったため、食事時間もなしの二十四時間ぶっ続けの修行となった。

尊師から与えられた課題は、喜覚支・現世捨断・集中の三つ。その三つを常に意識して修行を進めることが要求された。

わたしは、尊師が直接状態をチェックし指導してくださる、この恵まれた環境で修行できることがうれしくてならなかった。明日も尊師に何らかの体験を報告できるようにと、常に前向きに修行に取り組んだ。

最も苦手だったのは経行だった。確かに一日四時間にも及ぶ経行修行は、元来体が弱く、体力のないわたしにはつらいものだった。どうしてみんなはあんなに早く歩けるのだろうと不思議でならなかった。しかし、そんなときは、尊師がおっしゃった喜覚支の実践で乗り越えることができた。そして、限界まで経行をした後の究竟の瞑想では、必ずといっていいほど、神秘的な体験をすることができた。

◉修行の目的は……

修行に入って数日の間に、尊師のお言葉から、今回の修行では単にクンダリニー・ヨーガの成就というだけでなく、わたしたちを神通力者として生まれ変わらせ、さらにマハー・ムドラー寸前の状態で成就させたいと考えていらっしゃることがわかった。それだけでも大変なことに思われたが、さらにわたしを驚かせたのは、尊師の、

「成就の判定のために、アンダーグラウンド・サマディをさせることを検討して

いる。まあ、わたしが口に出したからには、多分そうなるだろう。」
というお言葉であった。
アンダーグラウンド・サマディといえば、正大師・正悟師の方々がなさってい
る修行である。尊師がわたしたちにそれほど高い成就を与えようと意思されてい
ると知って感激する反面、果たしてそのお心に応えることができるだろうかとい
う一抹の不安が脳裏をよぎった。しかし、間もなく、そんなことを言ってはいら
れないことをひしひしと感じる出来事が起こったのである。

確かにその日は修行がしづらかった。空気が重く感じられ、眠気も襲ってくる。
そんな折、尊師がいらっしゃった。尊師は部屋に入ってこられるなり声を大きく
してこうおっしゃった。
「何だこの波動は！　喜覚支が足りないぞ。つらいときこそ修行できなくてどう
するんだ！

なぜ落ちる救済者がいるかというと、他の煩悩を受けたときに修行ができなくなって、その煩悩に巻き込まれてしまうからだ。お前たちが現世で救済していて、他の煩悩を受けたときに修行ができなかったらどうなるんだ！　わたしは、お前たちに落ちてほしくないんだよ。」

そうだった。クンダリニー・ヨーガを成就するということは、救済者として生まれ変わるということだった。それなのに、わたしはクンダリニー・ヨーガの成就そのものを目的としてしまって、その後の救済についてはすっかり忘れていた。わたしの修行の目的は、救済に置かなければならない。そして、尊師がわたしたちを高い成就まで引っ張ろうとしておられるのも、崩れない救済者をつくり上げるためだったのだ。その尊師のお心に応えなければ、今回の修行に入った意味がないではないか――。わたしは目が覚めた思いがした。

◉食欲は幻影

尊師の与えられた課題のうち、現世捨断というのは、何も現世に対する執着を切ることではなく、食と睡眠と水分を捨断することだった。尊師は、人間を超えた存在となるためには、食べること、寝ること、水分を取ることさえ現世だとおっしゃるのだ。

修行に入る前、最も心配だったのは食の捨断だった。現世ではグルメを自認し、オウム真理教に入信した後に、菜食中心の食生活に切り替えた折、母から、

「あなたはありとあらゆるものを食べ尽くして、その結果、菜食にたどり着いたのね。」

と言われたほどの食道楽だった。そのわたしが、果たして食を捨断できるだろうか？　わたしは、食の煩悩の強さと意志の力の強さを試すために、修行に入ってすぐに断食に挑戦することにした。そのときは、結局六日の間食を断つことができた。そして、この経験を通して、食欲は幻影であるということがぼんやりとわ

かってきた。

その後、十日間ほど少しの食を取っていたが、イニシエーション（正悟師が作られ、尊師が修法されたパン・お餅・丹・ソーマなど、ごく少量）が始まったのを機会に、食事を取るのをやめた。初めのころは定期的に胃が動き、食を取ろうかどうか迷うようなこともあったが、そんなときは、

（わたしが食べるよりも、尊師が召し上がる方がずっとずっと価値がある。尊師に食を供養しよう。）

と尊師を観想すると、不思議なことに胃の動きは治まった。

食を断って十五日目、妥協の心が出て食事を取ってしまったことがあった。しかし、このときの体験は、食のデメリットを証智する上で非常に有意義だった。

まず、胃が小さくなっていたため、ほんの少ししか食べられなかった。意識は

もっと食べられると思っているのに、体が受け付けないのである。これによって、食欲は幻影だと実感できた。

また、尊師の修法されたお供物とは違って、一般の食べ物は非常に粗雑だということが体を通して理解できた。食物を飲み込んだとたんに体がずしりと重くなり、その後、数時間にわたって胃の重さが続き、非常に不快だった。

さらに、食を取らなければ鮮明な意識でいられた時間帯に眠ってしまい、食が意識を引き下げることもわかった。

これだけのデメリットがありながら、メリットは何一つ見つけ出すことはできなかった。そして、食欲が出てきたときは、この体験を思い出すことによって、食の煩悩を捨断することが可能になったのである。

◉目まぐるしい神秘体験

その他の煩悩、例えば性欲・情などは、ヴィジョンの中で解決することができ

た。例えば、性欲の場合、性欲を貪ることがいかに空しく浅ましいことであるかが証智できるようなシチュエーションでヴィジョンが展開されるのである。情についても同様だった。

霊的なプロセスも順調に進んでいった。もともと神秘的な体験の乏しいわたしは、クンダリニー・ヨーガの成就に必要とされる、意識の連続性、光の没入、化身の体験、ダルドリー・シッディの四つのうち、修行に入る前に体験していたのは意識の連続性だけであった。しかし、尊師から与えられた課題とアドバイスを念頭において修行を続けているうちに、一つ、また一つと体験することができた。それ以外にも、天耳通の体験、悦・喜・軽安（きょうあん）のプロセス、空間無辺境（くうかんむへんきょう）の経験など、様々な神秘体験が目まぐるしく訪れた。

◉人の心が移ってくる！

順調に進んでいった修行だったが、一月の終わりから二月にかけて、大きな苦しみがわたしを襲った。

修行する気が全く起こらなくなってしまったのだ。それればかりか、今すぐこの座を立って、現世へ帰りたくてたまらなくなる。

わたしは出家以来、下向（出家をやめて、現世へ戻ること）しないことが最低の帰依だと思っていたため、出家生活と現世とを天秤にかけたことはなかった。それなのに、これほど強く下向したいという思いがわくのは不思議でならなかった。その上、何が原因で下向したいのかはっきりとしないのだ。ただただ、修行するのが嫌で現世へ帰りたい、それだけなのである。実際に、普通なら十分もあれば終わる観想が、一時間経ってもできなくなってしまっていた。

そこでわたしが考えたのは、尊師のことだった。グルは瞑想に集中することを意思しておられる。グルの意思が百で、今のわたしの状態がマイナス百だとした

ら、プラス百まではできなくても、プラス一、プラス十、プラス五十と、少しでもグルの意思に近づくように努力しようということだった。

立ち上がりたいのをこらえて座り続け、観想を始めた。確かに初めは一時間以上もかかった。雑念にとらわれて観想が中断することもあった。それでもなんでも座り続け、観想に集中した。そして、十分で終えることができるようになったとき、苦しみは去り、以前のように修行に集中できる状態に戻っていた。

途中で気づいたことなのだが、実はこのときは、他心通（たしんつう）、つまり人の心を知る神通力によって修行に行き詰まっていた法友の苦しみに感応してしまい、その苦しみを自分のものだと勘違いしていたのだった。しかし、これだけリアルな他心通というのは初めての経験だった上に、最初にかなり深刻に考えたせいだろうか、これは他の苦しみだとわかった時点でもなかなか抜け出すことはできなかったのである。

◉〝バルドー〟の体験

修行の全プログラムを終えたわたしを待っていたのは、最後の修行、四日間のアンダーグラウンド・サマディだった。成就と認められるためには絶対に避けては通れない修行だった。

チェンバーの蓋が閉まったのが二月七日二十三時五十五分。再び蓋が開けられる二月十日二十三時五十五分までの丸四日間。この土に埋められた一辺三メートルの立方体の箱の中で、捨断の瞑想をし続けることがわたしに与えられた課題だった。

電気を消す。暗闇がわたしを包む。得体の知れない不安がわたしを襲う。必死に詞章に集中する。暗闇の中を様々な色や光が通り過ぎていく。雑念がわく。するとすかさず不安が頭をもたげる。また詞章に集中する。今度はヴィジョンが見える。雑念とともにまた不安が生起する。

チェンバーの中は、まさしくバルドー（死後の中間状態）だった。殺生（地獄）

のカルマゆえに、この暗くて狭い空間が怖くてたまらない。無智（動物）のカルマゆえに、その恐怖から逃避し、楽しみを求めてヴィジョンに逃げ込んでしまう。地獄、動物、地獄、動物……。一日目は、この繰り返しだった。

二日目には不安が頂点に達した。思わず尊師の写真を抱き締めて助けを求める。すると、アージュニァー・チァクラから強烈なエネルギーが入ってきた。少し落ち着いたので「思念如意の基礎」をして、不安を静めてみようと試みた。

「わたしは一カ月半以上の厳しい修行をしてきた。そして、このアンダーグラウンド・サマディは尊師が意思してくださっている。その上に、わたしは三年間功徳を積んできた。よって、この修行は必ず達成できる。」

と何度も何度も心の中で繰り返すと、不安は次第に薄れていった。

三日目には何とか平常心を取り戻し、四日目になってやっと瞑想に心を向けることができるようになった。

◉四日間で得たものは

このように、精神的にはかなり苦しんだが、対象的に肉体は安楽そのものだった。四日間を通して、体が宙に浮くほど軽く感じられ、蓮華座を組んでいることさえ忘れてしまうほどだった。そのせいか、初日から三日間、蓮華座を組み続けることができた。断水・断食に関しても何の苦もなかった。

神秘的な体験も豊富だった。

宿命通（しゅくみょうつう）の体験は印象的だった。暗闇の中に、横二十センチ縦十五センチほどのテレビの画面のようなものが浮かび上がり、その画面をものすごいスピードで様々なヴィジョンが通り過ぎていく。自分に関係のあるヴィジョンだということはわかるのだが、あまりにも流れが速すぎて内容が認識できない。これは単なる前生夢よりも一段レベルが高い体験だということなのだが、せっかくのヴィジョンを認識できなかったのは残念だった。意識がもう少し鮮明になれば、その一つ一つ

のヴィジョンをはっきりと理解できるようになるとのことだった。

また、これはアンダーグラウンド・サマディに入る前にもあったが、身体が拡大していくという「空間無辺境」の体験もした。これは形状界よりもっと上の世界、非形状界での体験である。

しかし、何といっても最大の収穫は、自分を証智できたことだった。チェンバーでは、自分の中にあるものしか出てこない。この四日間は自己に内在する三悪趣のデータをいやというほど見せつけられた。さらに、いかに高い世界のデータが不足しているかということもわかった。今後は、証智した自己の煩悩を捨断していくことが課題となるだろう。

二月十日二十三時五十五分、きっかり四日後にチェンバーの蓋が開けられた。そしてわたしのアンダーグラウンド・サマディは終わりを告げた。

◉煩悩を滅して広がる心

真理に出会ってから、既に四年半の年月が過ぎた。こうして過去をたどってみると、何と大きな四年半だったのかと思う。中でも、四日間のアンダーグラウンド・サマディを含めた約ふた月の修行期間は、最も大きな変化をわたしにもたらした。

以前であれば心が動くようなことに対しても、平らな心の状態でいられるようになった。例えば食欲。おなかが全くすかない。何かを食べたいという気持ちもわいてこない。食べ物を見ても、人が何かを食べているのを見ても、一切心が動かない。食欲という煩悩が全く生起しないのである。

嫌悪もない。卑屈さもない。プライドもない。ただ淡々と物事を見つめ、そして対応できる。個の修行の完成であるマハー・ムドラーの成就に比べると、まだまだ小さな安定だろう。しかし、この心の広がりはどうだろう。静かでゆったりとして、喜びに満ちている。

わたしは再びチェンバーの周りを歩き始めた。太陽は、もう富士山の頂上よりも高く昇っている。空は青味を深め、吹く風は太陽のぬくもりをはらんでいた。

その風を頬に受けながら、わたしはこんなことを考えていた。

太陽はその光ですべてを照らし出すだけではなく、こうして、冷えた風をも暖めてしまう。今のわたしは小さな光を心に宿したにすぎない。暖めることができるものもほんの少しだろう。しかし、少なくともわたしより苦しんでいる人に、この光と温かさを分けてあげることができる。そして、いずれはこの光と温かさを何倍にも強め、できるだけ多くの人の苦しみを癒せるようになりたい――。と。

マハーヤーナ・スートラ

MAHAYANASUTRA

麻原彰晃 著

解脱――それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!



解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 (本　社) 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
TEL 03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325
(営業部) 〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
TEL 03(5370)1598

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

好評！あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、 "オウム真理教ネット"

面倒くさい手続きは一切ありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

"オウム真理教ネット" のご紹介

TEL番号	03-5370-1726
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒168 東京都杉並区宮前3-8-11
"オウム真理教ネット" 事務局
TEL 03-3335-4965

「幸せになりたい！
でも、信徒になるのはちょっと……」
そんなあなたに贈る
最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』の定期講読を申し込まれた方は、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できますし、全国や海外の本部・支部をいつでも利用できます。
お気軽にオウムをのぞいてみませんか？

特典の一部を紹介すると……

◉オウム主催のイベント、説法会等へ自由に参加可。

◉幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼント！

◉成就者との対面および電話による悩み相談。

◉各種販売物を信徒価格で購入可。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？

※入会金無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申込み、料金の払い込みが確認されるとEH会員となります。
なお、定期購読の申込みは6カ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教本部・支部までお問い合わせください。

最高の智慧、神をも超えた力……最終解脱者があなたを変える！



オウム真理教

その修行ステージの高さゆえ、
〝イエシェ――完全なる絶対なる神の叡智〟
とチベット仏教の高僧より称えられる
麻原彰晃尊師。
最高の智慧と神通力を有した
日本でただ一人の最終解脱者です。
その麻原尊師が、
あなたに贈る幸福へのプログラム。
病から解放されたい……
最高の幸福を得たい……
解脱と悟りを得、神通力を
ほしいままにしたい……
こんなあなたの願いを、
麻原尊師が仏教・ヨーガ・密教の
あらゆる秘儀を駆使して、
速やかにそして確実にかなえます。

※資料請求券を貼付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。



キリトリ線

神通力者への道 2
資料請求券

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『神通力者への道 2』読者係」までお送りください。

〒154　東京都世田谷区世田谷2 - 8 - 17
オウム出版「『神通力者への道 2』読者係」

◆各本支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢佐木長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1,　S.R.Germany

神通力者への道 2

一九九二年三月二十七日　初版発行

定　価　五五〇円

編　集　オウム出版広報編集部

発行者　松本知子
　　　　石井久子

発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二ー八ー一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二ー一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

ISBN4-87142-030-2　C0014　P550E

神通力者への道 2

麻原尊師の愛弟子、
四名の体験

ISBN4-87142-030-2 C0014 P550E 定価550円(本体534円)